



TITLE:

第3章 京都大学病院構内AF17区の 発掘調査

AUTHOR(S):

富井, 眞; 長尾, 玲

CITATION:

富井, 眞 ...[et al]. 第3章 京都大学病院構内AF17区の発掘調査. 京都大学
構内遺跡調査研究年報 2015, 2013: 123-156

ISSUE DATE:

2015-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/226469>

RIGHT:

第3章 京都大学病院構内A F17区の発掘調査

富井 眞 長尾 玲

1 調査の概要

調査地点は京都大学病院東構内の西南隅付近に位置し、聖護院川原町遺跡に含まれる(図版1-385)。ここに、先端医療病棟の新設が計画されたために、発掘調査を2012年9月18日～2013年9月6日に実施した。調査面積は4100㎡で、調査直前までは標高48m前後の駐車場であった。途中、近世の遺物包含層の掘削時に調査区西南辺で滴状の金属水銀が十分に目視できるほどの広がりを見せたために、協議の結果、調査区全体で土壤調査を実施して汚染土壌を除去することになった。その結果、2012年12月7日～2013年9月1日の中断をはさんだので、実際の掘削調査期間はおよそ3ヶ月である。

近接地での既往の調査によれば、先史時代に関しては、東接する278地点で自然河道から縄文時代後期の土器が大量に出土しており、古代については、西方では、39地点で平安中期の護岸と平安後期の井戸や溝が、122地点でも平安後期の井戸・列石・埋甕などが、それぞれ検出されており、東方では、278地点の井戸から平安後期の瓦がまとまって出土している。このように、本調査区周辺での活動は平安後期以降に活発になる。鎌倉時代にも西方の122地点で井戸や溝が確認されているが、とくに室町時代には、本調査区を取り巻くように、井戸や溝や土坑や集石が、西方の122地点、北接する338地点、東接の278地点などで確認されている。近世にも、同様の地点で井戸や溝、土坑や集石が検出されているほか、東方の141・240地点では池が、278地点では砂取穴が、西北方の384地点では流路が、それぞれ検出されている。さらに278地点では、乾山焼・蓮月焼などの遺物も多数出土している。

発掘調査の結果、既存の建物による攪乱が調査区全体の半分程度を占めていたが、東北辺と西辺では、現地表下1mに近世後半の包含層を2枚確認できた。江戸後期の畑境の段差や区画溝、井戸と鋤溝や杭群などを検出した。中世以前については、遺物包含層は残存していなかったが、まれに中世や古代の土器片を含む混礫砂層とその下位のシルト層が、厚い砂礫層の隙間を埋めるように堆積していることを確認した。土質調査の結果を踏まえて、掘削が制限された遺物包含層などもあったが、出土遺物は、ほとんどが江戸～明治時代の陶磁器・瓦で占められ、整理箱で133箱を数える。

2 層 位

調査区北辺と南半には広く攪乱がおよんでいる（図版31-1・3）。掘削作業は、調査区中央のX=870ラインおよびX=860ラインに東西方向の層位確認用の畔を残して、断面観察をおこないながら進めた。また、北壁東辺と南壁で部分的に残存する堆積層の残りの良い部分で地層断面図の作成を予定していた。しかし、近世の遺物包含層に土壌汚染が認められ、その後、遺物包含層を含めて処分対象となった地層が調査区の広い範囲におよぶこととなったので、京都市とも協議し、処分対象地層の発掘を断念して通常の発掘作業が可能な箇所のみで調査を再開することにした。その結果として、最終的に断面図を作成できたのは、X=860ラインの東西畔全体と、X=870ラインの東西畔のごく一部に限られた（図版31-2，図67・68）。

表土（第1層）は、厚さ約2mに達し、機械掘削により除去した。表土下部には、278・338地点と同様に、レンガを包含する明茶褐色～褐色の粘質土が分布していたところもある。第1層を除去すると、調査区北辺では、338地点と同様に、遺物包含層ではなくその下位の鴨川・高野川がもたらした自然堆積層（第6層）があらわれ、西下がり基調となるラミナを確認できる。X=880以南では、攪乱を免れた部分には黒灰色土が分布する。

黒灰色土（第2層）は、Y=1852辺りで検出された南北方向にはゆる東下がり近世の段差の西側、および調査区東北辺では、厚さ30cmほど残存しており、人工層位によって上部と下部に分けて掘削した。また、段差の下位側すなわち東側では、X=880以南では色調の違いを確認できたので、やや明るい上部を黒灰色土Ⅰ（第2a層）、黒味の強い下部を黒灰色土Ⅱ（第2b層）、として掘削し、第2b層上面では遺構検出もおこなった。第2層上部および第2a層は、ガラスやレンガの破片、および濃青色の釉で染色体のような意匠を描く近代染付の破片などが散見できるが、第2層下部および第2b層には、そうした近代の遺物は認められず、端反りの染付碗などを含むので、黒灰色土は、幕末から明治にかけての包含層といえる。なお、調査区西南辺の段差上位側の黒灰色土下部の掘削中に、水銀の集積が認められたため（図69）、調査区全体で土質調査をおこなった。その結果、その周辺の50m前後の黒灰色土は掘削調査ができなかった。

黒灰色土の下位には、淡褐色土（第3層）が広く分布する。下位の褐色混礫砂層（第4層）との境界には礫を多く混じえるので、礫をまれにしか含まない上部とその混礫部とを分層した（第3a層と第3b層）。第3a・3b層は、細片だが端反り口縁や瀬戸産と思

層 位

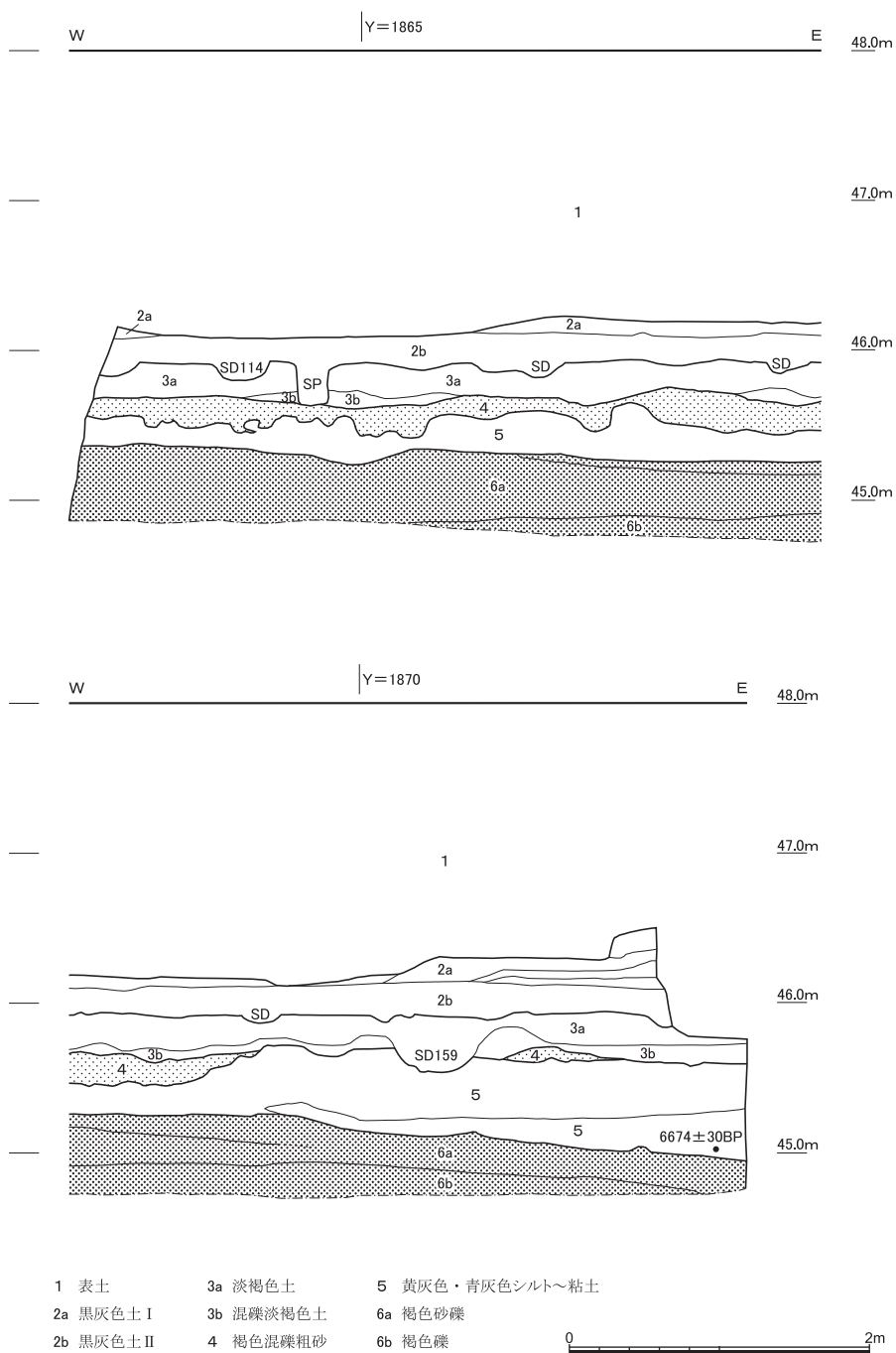


図67 調査区東西畔 (X = 870) の層位 縮尺1/50

京都大学病院構内A F 17区の発掘調査

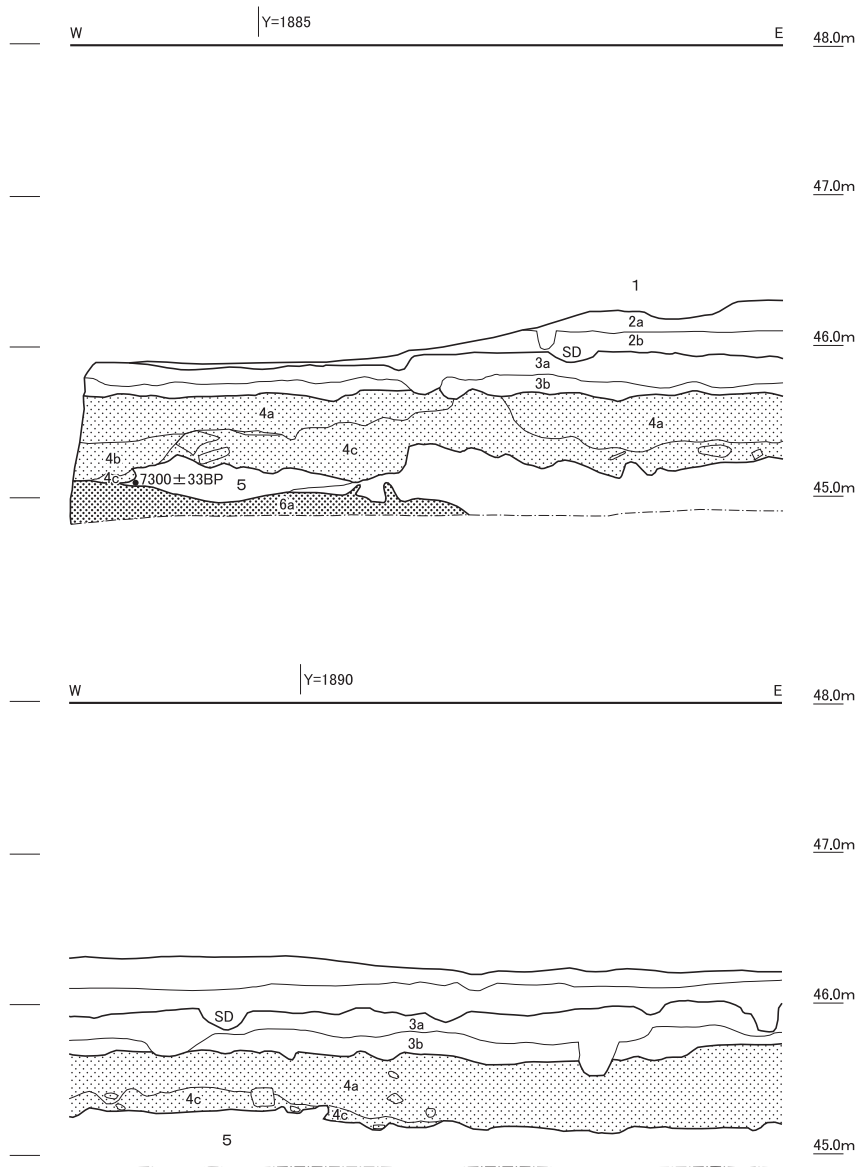


図68 調査区東西畔 (X = 860) の層位 縮尺1/50

層 位

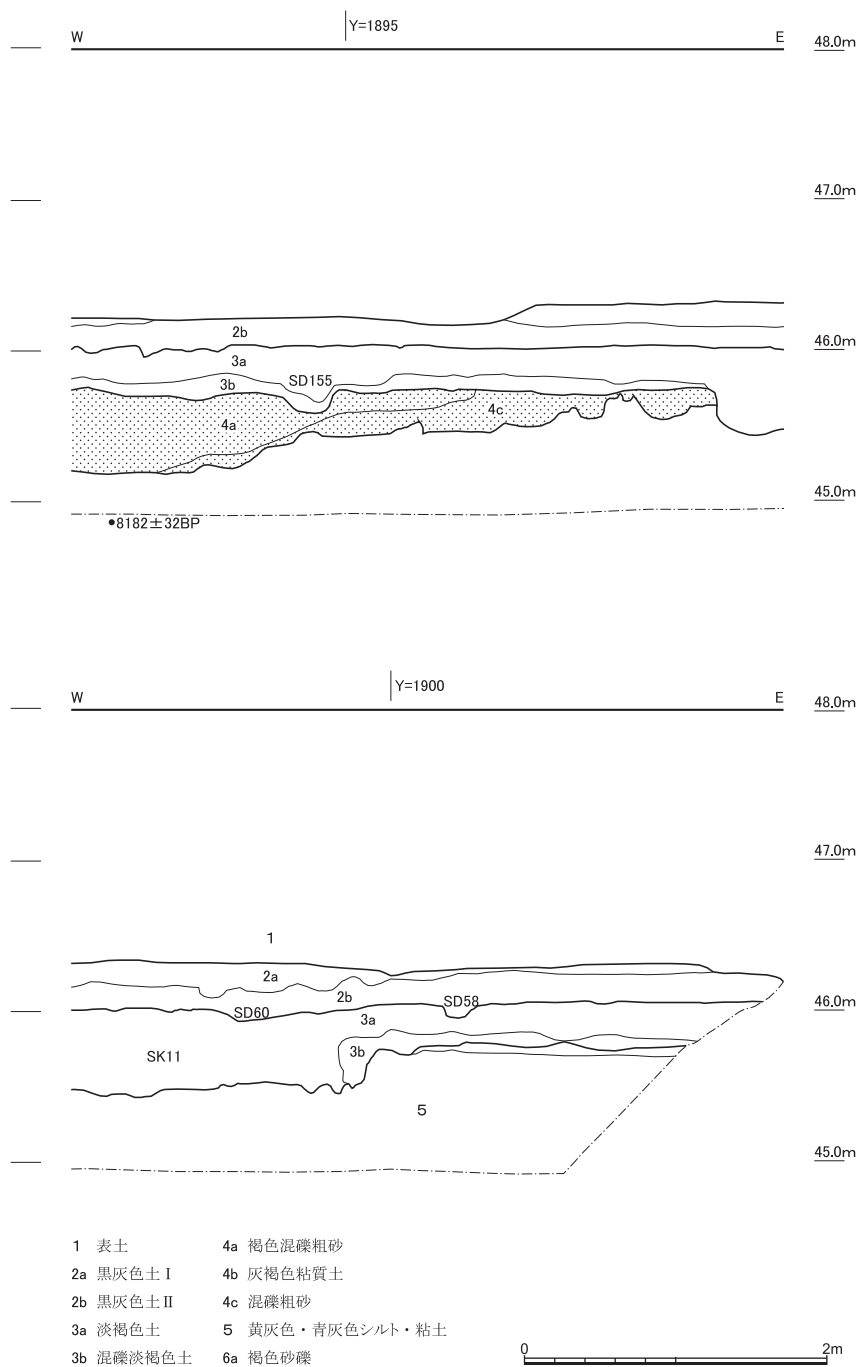


図68 つづき

われる染付が数点出土するので、幕末にまで下る可能性もあるが、摩滅していない数cm台以上の破片は17～19世紀前葉ごろまでにおさまる。段差上位のY = 1852以西では、すぐに自然堆積の厚い砂礫層（第6層）があらわれる部分が広く、また、淡褐色よりは茶色みが強くなっている（第3'層）。なお第3層については、汚染土壌の除去によって、その大半と第3'層全体は掘削調査ができなかったが、調査区東辺および中央付近では合計60㎡程度は掘削調査できた。

第6層上面の標高の低い範囲が広い、調査区東北辺およびX = 880以南の段差東側には、第3層と第6層の間に、おもに青灰色～黄灰色を呈するシルト層（第5層）が堆積しており、層厚は東北ほど厚く、2m近くに達する部分もある。このシルト層の上位には、広い範囲で、拳大までの法量の多数の礫と、まれに中世以前の土師器・瓦器・陶器・瓦の破片、およびシルトの偽礫を含む、褐色混礫砂層（第4層）が堆積している。出土遺物は、もっとも新しい時期と思われるのはF類の土師器皿で、江戸時代の遺物は確認できなかった。ラミナを確認できず、礫や遺物も立位のもものが少なくないので、一挙性の堆積と思われるが、部分的には上方粗粒化を確認できるものの拳大の礫はむしろ第5層境界付近の下部に多いので、人為的堆積物の可能性も排除できない。また、調査区東辺では部分的にレンズ状に粘質土が介在し（第4b層）、そこからはあまり摩滅していないD類の土師器皿の大型破片や数点のF類の土師器皿が出土した。したがって、第4層は鎌倉時代以前の堆積物と、中世末期以後の堆積物とに分離できるのかもしれないが、断面観察ではかなわなかった。なお、この第4層と、北接する338地点で確認された18世紀後半の土石流堆積物との対応関係は不明である。

第5・6層からは、遺物の出土を確認していない。シルト質の第5層は、主に下部で、部分的には粒径がさらに細くなって粘土となることもある。また、下部を中心に希に有機質が残存していたので、この層の堆積年代を検討するため、(株)加速器分析研究所で放射性炭素年代測定をおこなった。X = 860畔の、Y = 1893付近で標高44.9mのやや黒化して粒子も細かい粘土質に近い部分の「バルク」とよばれる微細植物片を含む土壌を試料にした部分では $8182 \pm 32\text{BP}$ （測定番号：IAAA-131416）、同じくX = 860畔の西端付近の、Y = 1884付近で標高45.1mの青灰色シルト中の木炭を試料にした部分では $7300 \pm 33\text{BP}$ （IAAA-131414）、X = 870畔の、Y = 1872付近で標高45.0mの青灰色シルト最下部の紐状の植物質を試料にした部分では $6674 \pm 30\text{BP}$ （IAAA-131415）、と西へ向かって新しくなる。これら3点の試料の年代はおよそ縄文時代早期～前期頃におさまると思われる。

褐色砂礫層（第6層）は、堆積岩を主体とし、上面の標高は東および南下がりとなる。調査区中央のX=870畔では、上部に黒化した透かし礫の広がりをもなう20～50mmの礫の緩やかな盛り上がりを確認した（第6b層）。北接する338地点でも同様の堆積を確認していたが、本調査区でも、この辺りが一時は高野川の河床だったことを想定できる。第6b層の上位の第6a層には、100mm台の礫の分布する下部から徐々に上方細粒化していく状況を確認できたので、離水傾向がうかがえる。ただし、第6a層の最上部は、粒径が3～5mm台の花崗岩粒や頁岩粒が主体で、第5層との間には細砂やシルトを認められない。

調査区東辺では、第6a層には、10mm台の礫がほとんど含まれないが、ラミナを確認できない。また、直上のシルト層（第5層）に陥入している部分もある。地震による液状化と判断できるが、その発生時期は、縄文早期以降ということしかわからない。

3 近世・近代の遺構と遺物

(1) 遺 構（図版31・32、図69～71）

近世の遺構検出は、黒灰色土の掘削中および掘削後、また黒灰色土Ⅰ掘削後および黒灰色土Ⅱ掘削後におこなった（図版31～3）。図69では、第4層（淡褐色土）ないし第6層（褐色礫層）の上面、すなわち黒灰色土・黒灰色土Ⅱの掘削後の遺構検出面を近世第2面とし、黒灰色土Ⅰ掘削後の遺構検出面を近世第1面としている。また、黒灰色土掘削中に検出した遺構は、便宜的に近世第1面に組み込んだ。しかし、遺構検出面と包含遺物との対応は円滑ではなく、近世第1面で検出した遺構には近代のものも含まれたり、出土遺物から同時期と判断される遺構でも別の遺構面で確認されたりした。なお、汚染土壤の除去作業のため、個別遺構図の作成は断念せざるを得なかった。

溝・石列・段差など Y=1852辺りに、比高差60cm程度の段差がX=880ライン付近から南北方向に認められる。段差際上縁部には、黒灰色土の掘削中には、段差に並行して南北方向にはしる小さな溝SD1を検出し、また、黒灰色土除去後の近世第2面では、上縁部が10cm前後盛り上がりそのあたりが幅80cm程度で南北方向に硬化しているのを確認した。近世第2面では、段差際下縁部には、底面に鋤先痕跡と思われる小孔列をとまう同様の並行溝SD126がはしる。端反り椀を包含する幕末の溝である。そして、段差を境にして、下位の東側には鋤溝と杭群が展開するが、上位の西側にはそうした鋤溝は認められない。なお、X=860ライン以南には深い攪乱がおよんでいるので、並行溝を備えたこの段差がどこまで続くのかはわからない。南北方向にはしるやや大きめの溝は、このほかに、

京都大学病院構内A F 17区の発掘調査

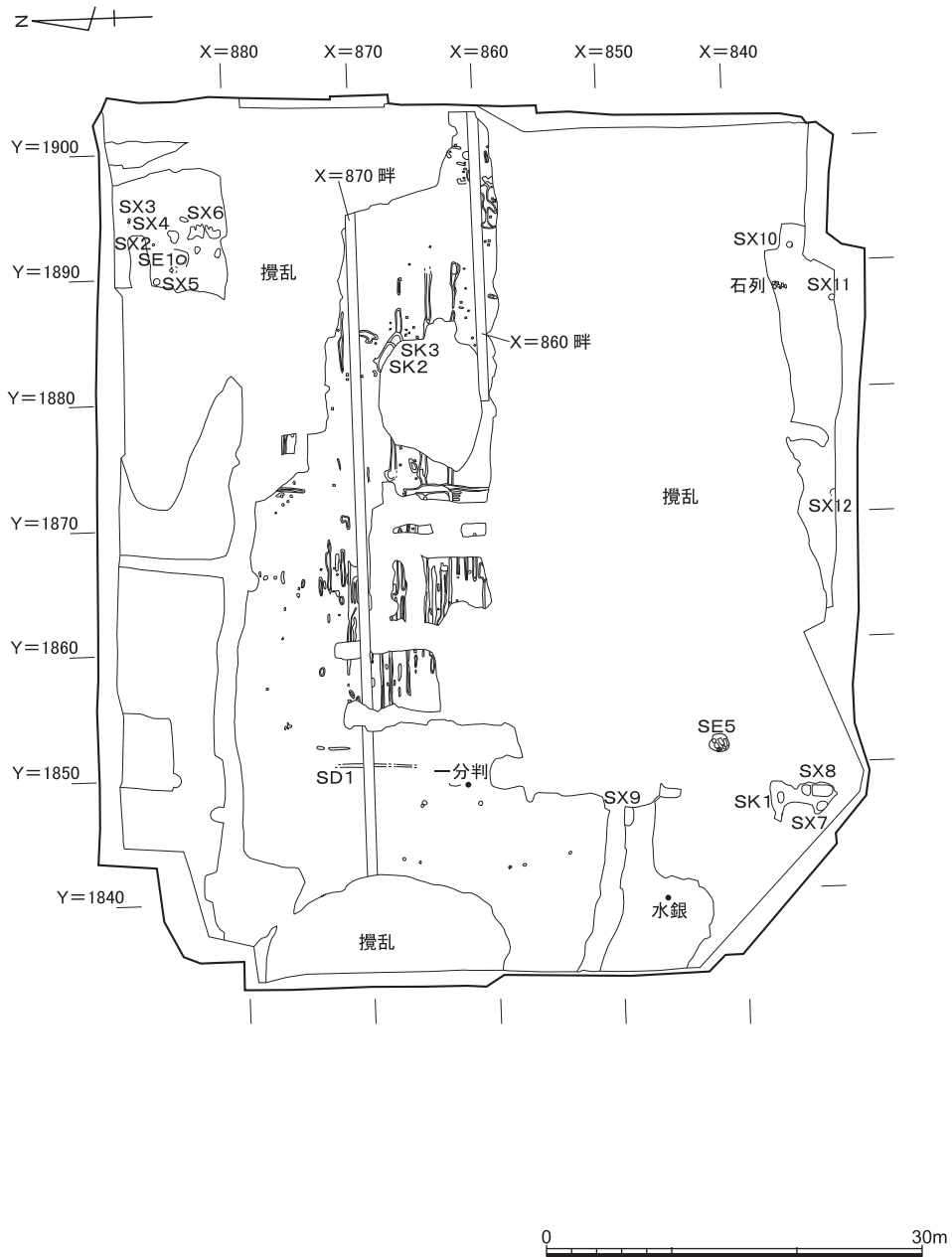


図69 黒褐色土掘削中・黒灰色土 I 掘削後の検出遺構 縮尺1/600

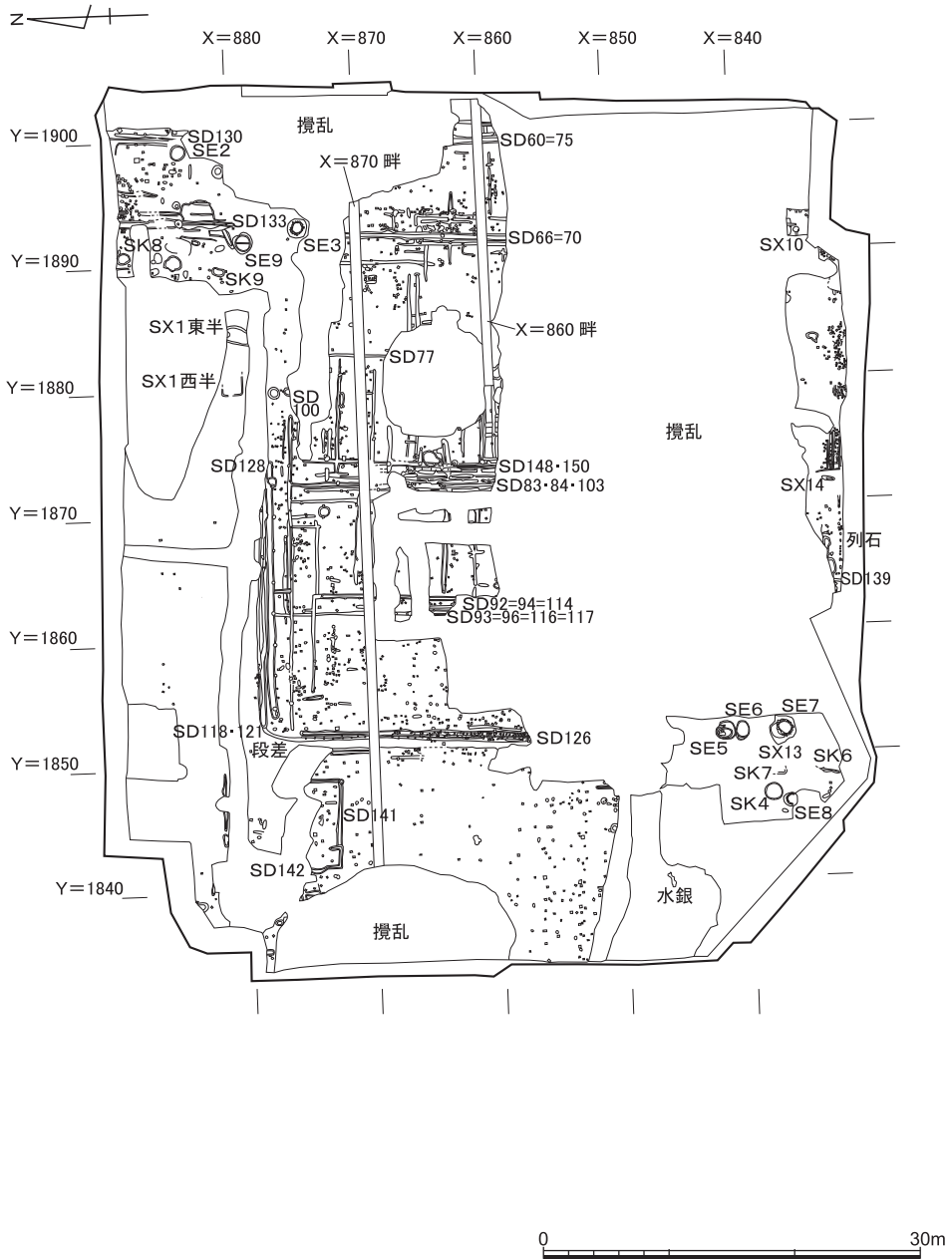


図70 黒褐色土・黒灰色土Ⅱ掘削後の検出遺構 縮尺1/600

約20m間隔となつて、Y = 1873ライン辺り（S D 148・150, S D 83・84・103）およびY = 1894ライン辺り（S D 66 = 70）にもあり、前者では、溝のはしる辺りが緩く西下がりの傾斜を見せる。そしてそれらの中間のY = 1862ライン辺り（S D 92 = 94 = 114, S D 93 = 96 = 116 = 117）およびY = 1883辺り（S D 77）には、それよりはやや細めの溝がはしる。また、Y = 1900ライン辺りにもやや大きめの溝がはしる（S D 60 = 75, S D 130）。これらの溝はおおよそ平行している。出土する遺物には、端反り碗を認められなかったものの小片ばかりで量も少ないので、幕末まで機能していたものがある可能性は否定できない。

X = 878ライン付近には、東西方向の溝S D 128がはしる（図版31 - 4）。近世第2面で検出したが、黒灰色土Ⅱの掘削中から、この上部には陶磁器や瓦の破片を中心とした遺物が、比較的多く出土していた。端反り碗を含むので幕末と判断する。溝の南縁には、200cm前後の間隔で並ぶ径30cm前後の柱穴も検出した。この柱穴列については、上面検出時の精査によって、溝の埋積途中に埋没した柱穴もあったことを確認している。さらに、S D 128の北には、部分的にS D 128に切られながら同じく東西方向にはしる規模の小さい溝がある（S D 118・121）。出土遺物は小片ばかりで量も少ないが、S D 128と異なり、端反り碗を認められなかった。また調査区南縁では、黒灰色土の掘削後に、X = 835ライン辺りで、人頭大の石列をともなつて東西方向にはしる、小規模な溝S D 131を検出している。

このほかに、Y = 1893ライン辺りでは、調査区北辺ではS D 133のすぐ西側の淡褐色土上面で、それ以南でも淡褐色土内で、南北方向にはしる石列を確認できる。近世第1面で調査区南縁で検出したものと異なり、東にもほとんど振れていない。338地点で検出した石垣の延長と判断できる。

調査区東北辺の遺構 S E 1は、黒灰色土上面で検出した漆喰製の野壺で（図版31 - 5）、もともとあった井戸の針葉樹縦板組の木桶の上部に、井戸をふさぐように構築されていたが、底部は割れて井筒に抜け落ちていた。野壺の内部からは、全体の1 / 4程度の残存度となる大甕の破片がまとまって出土した。明治期の遺物は含まない。井戸の木桶内部は、出水が著しく、2段目内部の掘削中に水压を受けて倒壊した。2段目の縦板は、長さ40cm以上あり、その上端の標高は45.3mをはかる。

S E 2は、S E 1から東に7mほど離れている、多量の針葉樹木片を含む直径1.5m前後の円形の土坑で、深い攪乱の除去後に検出した（図版31 - 6）。第5層の厚い堆積の途中で底面となっており、底面標高は44.7mをはかる。端反り碗が出土しており、幕末の遺構と考える。不透水性のシルト層に掘り込まれているので、木片の使用に備えた貯蔵施設

の可能性はあるが、素掘りである。同程度の標高で機能していたと思われる井戸SE1の存在から、井戸の掘削を断念して残存した土坑とも考えられよう。

SE3は、SE1から南に10m離れて位置する石組の井戸で、針葉樹縦板1段組の木桶を有し、底面の標高は43.3mをはかる（図版32-1）。木桶の長さは60cm程度。深い攪乱の掘削中に確認し、石組みは7、8段しか残存していないが、掘り方は近世第2面で検出できた。端反り碗を含まず、19世紀前半までの遺構と思われる。なお、木桶上端付近で、内部に拳大の礫1点が収まった状態で縦板組の手桶が出土している（図版32-2）。縦半割分くらいしか残存していないので、水の汲み上げ中に井戸石の落下を受けて破損した釣瓶と判断する。

SE1とSE3の間に、木枠の野壺SE9を、淡褐色土上面で検出した。木枠底部が5cmほど残存しており、底面中央には南北方向に幅10cm弱の板を渡している。検出面からの深さは60cm前後で、底面の標高は45.5mをはかる。出土遺物は少ないが、18世紀後半から19世紀と判断する。

SX1は、攪乱の除去後に確認した集石土坑で、深さ1m程度はあるものの、深い攪乱にほとんど壊されていた。遺物量は少ないが、端反り碗の出土を見ない。19世紀前半ごろまでの遺構と思われる。SX2～4は、SE1の東北辺で黒灰色土上部の掘削中に検出したいわゆる胞衣壺で、いずれも掘り方は確認できず、蓋は割れて出土している。SX3・4は近接しており、口縁の標高もほとんど同じだが、西側のSX4の身部の東辺部分が破損していることから、東側のSX3の方が後出と判断する（図版32-3）。

SX5・6は黒灰色土の掘削中に確認した、散漫な瓦の集積。ほとんどが棧瓦だが、SX6には丸瓦1点も含む。端反り碗を確認しており、幕末の遺構と思われる。

土坑SK8も瓦の集積があり、瓦破片を主体に、整理箱1杯分の遺物が出土した。ほとんどが棧瓦だが、丸瓦破片も含む。端反り碗を含まないので、18世紀後半から19世紀前半ごろと判断する。その南の土坑SK9は、不整形で出土遺物も多くないが、これも端反り碗を含まないので、18世紀後半から19世紀前半ごろと判断する。

淡褐色土を埋土とする遺構は（図71）、おもに鋤溝群で、遺物量は少なくその中でも中世の土器片の比率が高いものの、近世後半と思われる陶片も出土する。溝の走向は、黒灰色土を埋土とする鋤溝群と同様に、南北方向とそれにほぼ直交する東西方向にはしる二種がある。すなわち、黒灰色土を埋土とする幕末～明治にかけての土地利用は、それ以前の近世後半段階には成立していたと想定できる。なお、調査区東壁際では長方形を呈すると

京都大学病院構内A F 17区の発掘調査

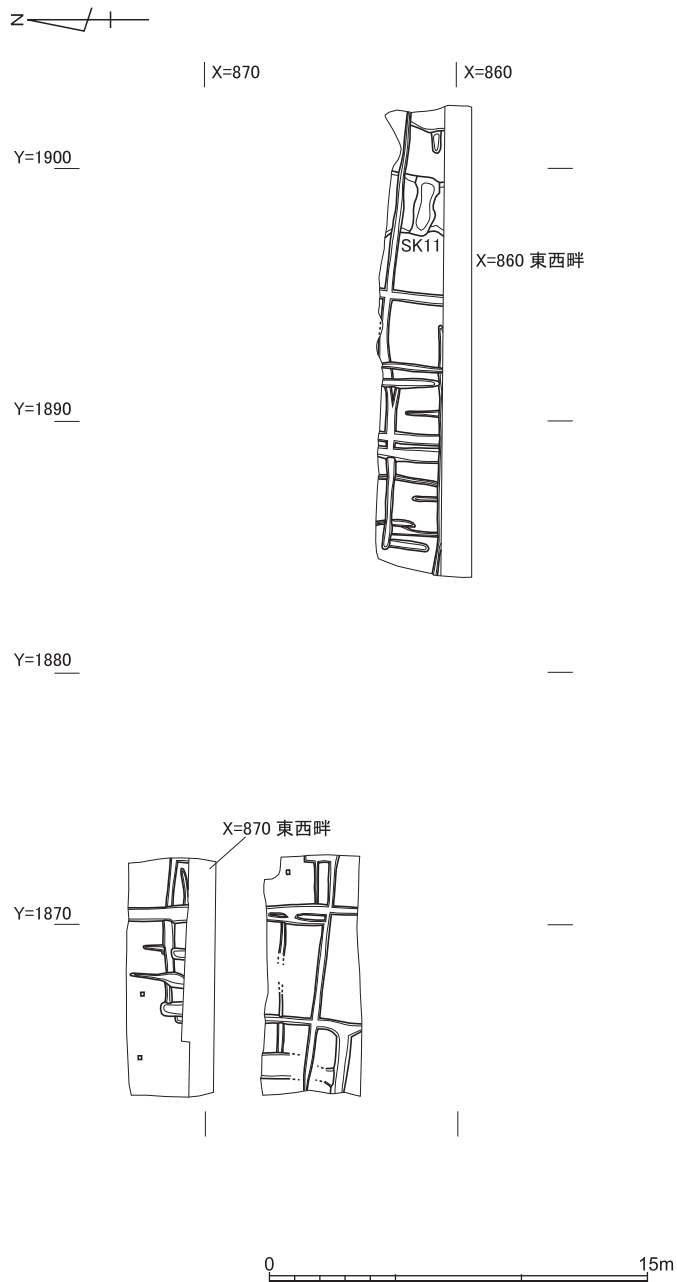


図71 淡褐色土掘削後の検出遺構 縮尺1/300

思われる土坑SK11を検出しているが、底面には凹凸があり、また遺物の出土量も小さいので、性格はよくわからない。

調査区西辺の遺構 SE5は、調査区西南で深い攪乱の除去後にシルト層上面で確認した直径2m前後の円形土坑で、一抱え以上ある花崗岩5点をはじめ、大ぶりの礫を包含する。検出面からの深さは0.5mで、底面の標高は44.9mをはかる。出土遺物は少数の陶磁器細片のみ。南接するSE6も、攪乱除去後のシルト層上面で確認した同規模の円形土坑で、少数の陶磁器片以外に遺物をほとんど含まないが、底面標高は45.2mと浅い。SE6のすぐ南では、石組の井戸SE7をシルト層上面で検出した。石組最下段には縦長に成形した花崗岩を配し、その下位には針葉樹縦板2段組の木桶を有する。底面の標高は42.9mで、石組内から明治期の染付が出土している。

SE7から西に5mほど離れて、石組の井戸SE8を淡褐色土上面で検出した（図版32-4）。SE7よりは小ぶりの石が主体で、13段以上残存している。石組の下位には、遺存状態が悪いものの、針葉樹縦板1段の木組みを確認できた。検出面の標高は46.4mをはかるが、底面標高は、計測前に石組が倒壊しその後の汚染度除去により、測量できなかった。端反り椀を確認できず、19世紀前半までの遺構と判断する。

SX7・8は、調査区西南部で黒灰色土上面で確認した土器溜。明治期の陶磁器が主体となるが、多数の獣骨や10cm前後の二枚貝、棧瓦片も含む。SX8は、上面検出後に掘り下げていくと、無遺物地帯をはさんで南側2/3と北側1/3とに分離できた。

SX9は、調査区西辺で黒灰色土上面で確認した土器溜。上面には明治期の陶磁器もある。その下位には、東西方向の溝を、攪乱の断面で確認しており、またその西側の黒灰色土下部の掘削中には、SX9と同様に多量の遺物の出土を見たが、そこには明治期の遺物は認められなかった。土質調査によって、SX9本体およびその西側の土器溜の遺物の多くを回収できてはいないが、19世紀以前の溝の埋没過程で多量の陶磁器が廃棄され最終的に東辺のSX9の地点には明治期でもまだ投棄が継続した、と推測する。

SX13は、SE7に切られる1m×2m程度の広がりの瓦溜まり（図版32-5）。端反り椀と思われる磁器片も出土しているので、幕末の遺構と判断する。10cm四方を超える破片は無く、復元率が50%を超える個体もなかったが、合計で整理箱9杯分出土した。

SK1は、調査区西南辺でSX8から北へ約3m離れて黒灰色土掘削中に検出した、長辺80cm程度の長方形の土坑で、5cm大の大量の小礫と、獣骨と思われる多数の骨片を包含していた。深さは約10cmで、底面は淡褐色土には達していない。獣骨や遺物の出土状態が

ら長方形土坑と判断したが、掘り方を確認できたわけではない。人工遺物は少ないが、明治期の陶磁器が出土せず、幕末の可能性のある磁器が出土した。

S K 1 のすぐ北側で、黒灰色土を除去した淡褐色土・砂礫の上面で、土坑 S K 4 を検出した。南西すぐには井戸 S E 8 が位置するが切り合い関係は見られない。径120cm前後の円形で、検出面からの深さ80cmをはかる。底面は、壁面と同じく砂礫層で、平坦で45.5mをはかる。遺物をほとんど含まないが、明治期の陶磁器は出土しないので、18世紀後半から19世紀と判断する。

同じく調査区西南辺では、本体が攪乱で破壊されてわずかに遺構の西側のみが残る落ち込み S K 6・7 を検出している。遺物量は少ないが、S K 6 には明治期の磁器やガラス片を含み、S K 7 には明治期のものは含まれない。

このほか、調査区西辺の段差上位側では、黒灰色土下部の掘削中に、X = 862 辺りで一分判（金）1 点と、X = 846 辺りで金属水銀の集中部を、それぞれ確認したが、どちらも掘り方は確認できなかった（図69）。

調査区南縁の遺構 東辺では、黒灰色土掘削中に瓦集積土坑 S X 10 を検出した。これも土質調査によって上面検出時以外の遺物を回収できなかったが、近世の遺構と推測している。この5m南西には、黒灰色土掘削中に、散漫な土器の集積 S X 11 を検出した（図版32-6）。明治期の陶磁器は出土していない。土器溜 S X 11 から15mほど西側では、攪乱の底面で小規模な明治期の土器溜 S X 12・14 を検出した。

その他の遺構 調査区西北辺で、比較的大きめの石を組んだ井戸 S E 4 を検出している。周辺の調査成果に照らせば、このサイズの石組の井戸は中世の可能性があるが、土質調査の結果を受け、掘削を断念した。

以上の近世第1・2面検出で確認した遺構のうち、近代のものは、井戸 S E 7、土器溜 S X 7～9・12・14、土坑 S K 6 である。それ以外の、井戸 S E 1・3・8、野壺 S E 9、円形土坑 S E 2・5・6・S K 4、集石土坑 S X 1、獣骨集積土坑 S K 1、土坑 S K 7、胞衣壺 S X 2～4、瓦集積 S X 5・6・10・13、S K 8、土器溜 S X 11、S D 128などの区画溝は、18世紀後半ごろから幕末にかけてとみなし得よう。そのうち、幕末の遺物を含むのが、S E 1・2、S K 1、S X 6・13、S D 128 である。また、調査区内での遺物包含層からの遺物の出土傾向として、調査区東北辺の Y = 1890 以東で X = 880 以北、および調査区西辺の段差上位の X = 860 以南では、量も多くまた破片の法量も大きめのものがあるが、それ以外の地点の包含層からは、量が少なく破片もほとんどが小ぶりである。

(2) 遺物 (図72～79)

出土遺物の大半を占めるのは、第2層出土の近世後半から近代の陶磁器類である。容器以外では、瓦は少なく埴塼の破片が目立つ。中世以前では、第4b層（灰褐色粘質土）からほとんど摩滅していない中世の土師器がわずかに出土したが、そのほかは摩滅した中世の土器や瓦の破片で、先史時代から古代にかけての遺物はほとんど出土していない。

S D128出土遺物 (Ⅱ1～Ⅱ36) Ⅱ1は陶器碗。外面には褐色の地の上に淡黄色、淡緑色、鉄絵、白泥を用いて庭園のような文様を描き、口縁部から内面にかけては白色の地を塗り、これら全体の上に透明釉を施す。Ⅱ2～Ⅱ4は灯明皿。Ⅱ2・Ⅱ3は、内面に櫛書きによる沈線を施し、Ⅱ4は内面の口縁近くに18弁の菊花文の貼付けを施す。Ⅱ2の口縁の大部分とⅡ3の口縁の一部には煤の付着が見られる。いずれも淡黄灰色に発色する釉を内面から口縁外面付近まで施す。Ⅱ5～Ⅱ8は、灯明受皿。Ⅱ5は完形であり釉は黄白色を呈する。Ⅱ6は口縁部が残存しておらず、釉はやや青灰色がかった発色。Ⅱ7は外面がやや赤変していてⅡ7・Ⅱ8の釉は黄灰色を呈する。Ⅱ6～Ⅱ8は受口の一部のみが残存する。Ⅱ2～Ⅱ8は京・信楽系か。Ⅱ9～Ⅱ12は陶器蓋。Ⅱ9・Ⅱ10は外面に緑灰色を呈する釉を施し、いずれもつまみの先端が欠けている。Ⅱ9は口縁部も欠けている。Ⅱ10は鉄絵による文様の上に釉を施す。Ⅱ11は口縁部が欠けており、内面には鉄釉、外面はつまみ周辺に鉄釉を施した後に白泥でいっちゃん描きを施している。Ⅱ12は水注の蓋である。Ⅱ13は陶器碗の一種であるが、外面に把手の装着用に上下を穿孔した窓状の付着物を有し、内側面中央付近には横方向の鉄釉による線描がなされ、その上に淡黄灰色を呈する釉が施されている。18世紀半ば～後半頃の京焼系か。Ⅱ14は軟質施釉陶器の玩具で、土師質の胎土の外面上半に薄い透明釉がかけられている。

Ⅱ15～Ⅱ21は、磁器染付碗である。このうちⅡ15～Ⅱ17は口縁部が端反りであり、幕末頃の遺物と考えられる。Ⅱ15は外面に草花のような文様を描き、内面見込み中央にも文様を配し、その周囲および口縁付近に円弧の線描を有する。Ⅱ16は、外面にのみ円形の意匠が等間隔に施されていて、内面に文様はない。Ⅱ17は、外面に果実のような文様が施され、内面は円弧状の線描のみである。Ⅱ16・Ⅱ17は内外面の釉内にひび割れが見られ、焼成は良くない。Ⅱ18・Ⅱ19は、外面にのみ草花のような文様を有する。Ⅱ20は青磁染付の底部である。外側面には緑がかった青磁釉が施され、見込み中央の五弁花と底裏の銘がくすんだ藍色で描かれる。Ⅱ21は、外面を不等辺の亀甲状に押圧して成形し、その上と底裏に黒褐色を呈する釉を、口縁部には銹釉を施す。一方内面には、濃紺の呉須で山水を描く。

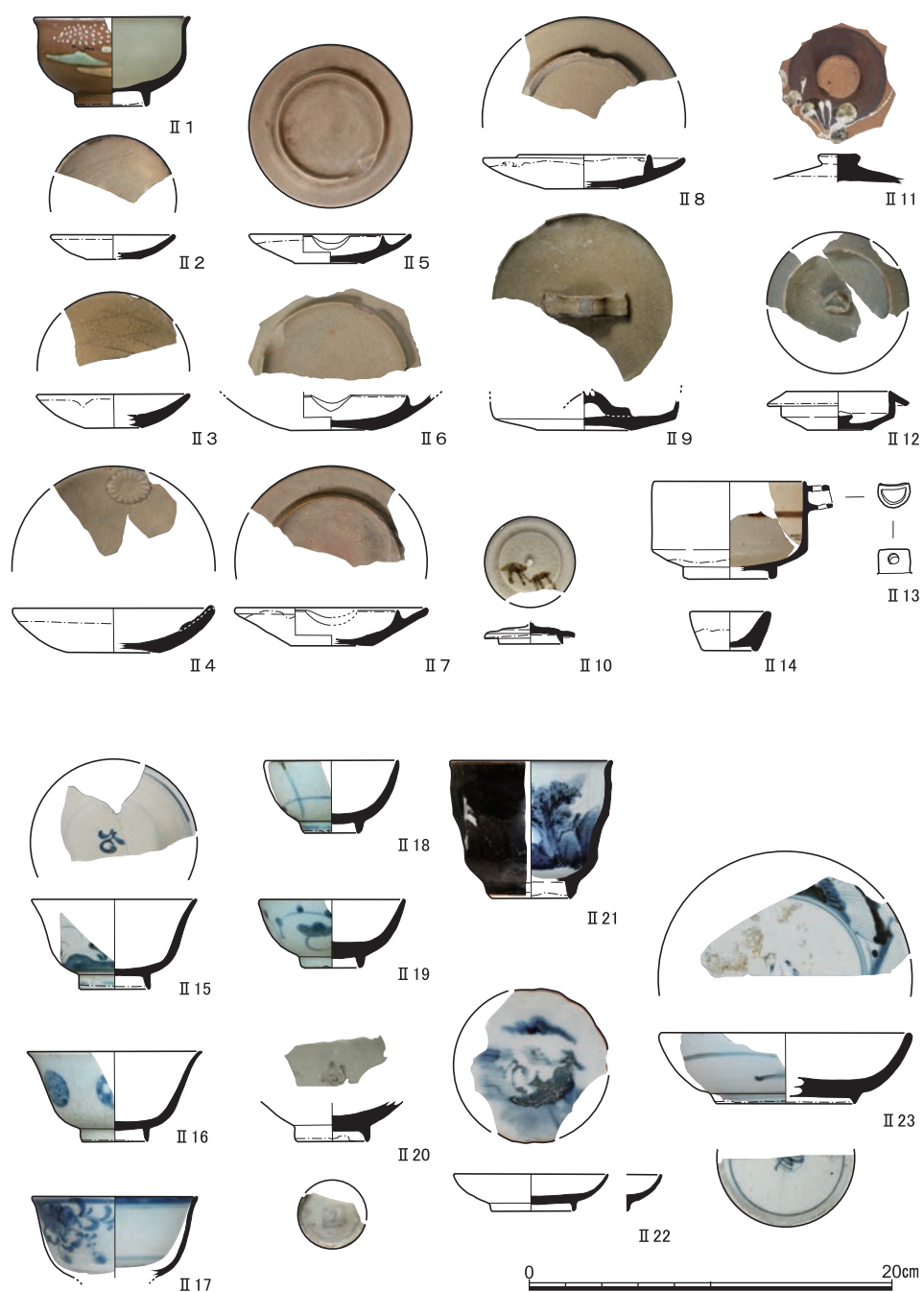


図72 S D128出土遺物(1) (II 1 ~ II 13陶器, II 14軟質施釉陶器, II 15 ~ II 23磁器)

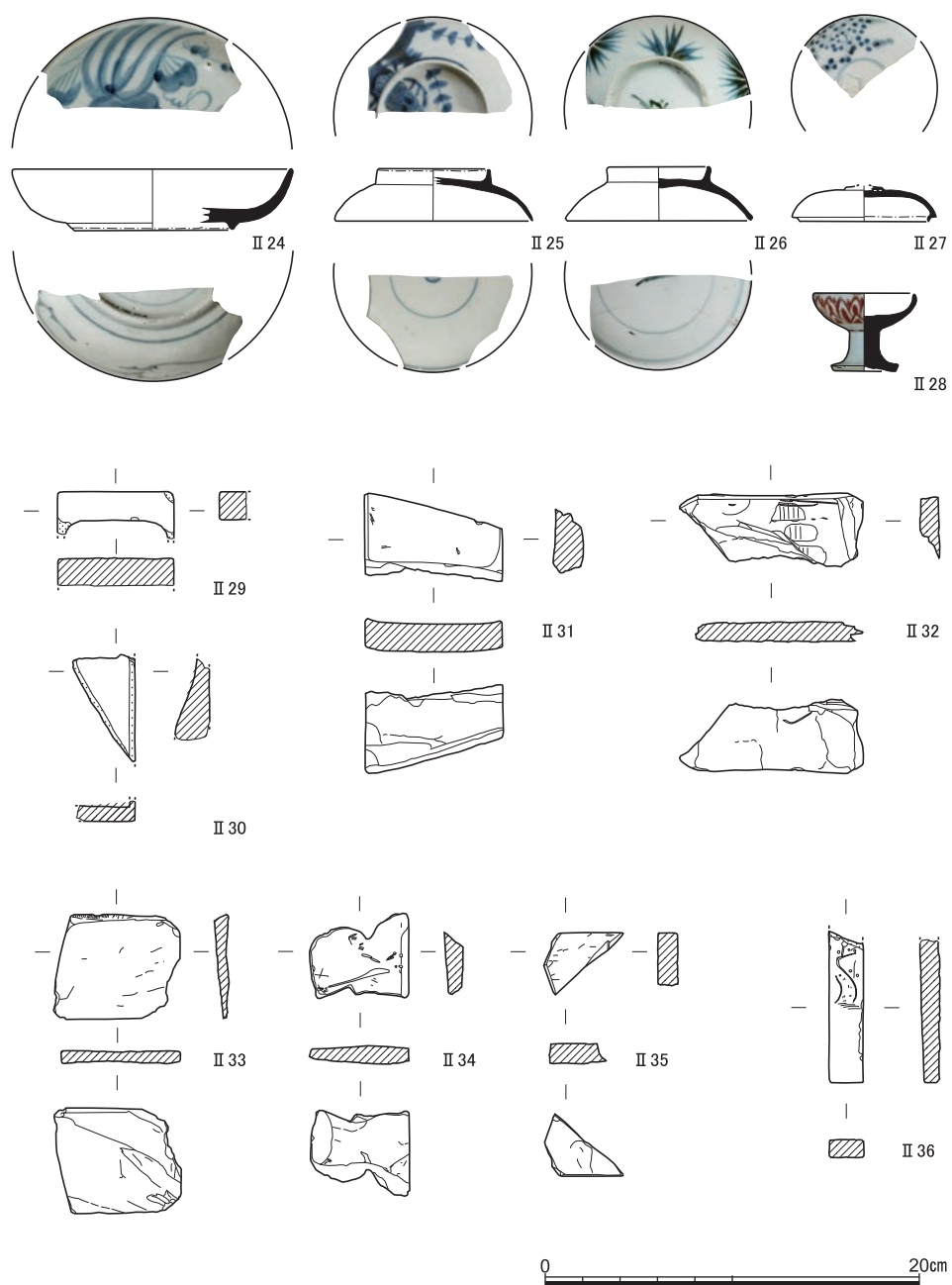


図73 S D128出土遺物(2) (II 24～II 28磁器, II 29・II 30硯, II 31～II 35砥石, II 36石製品)

Ⅱ18～Ⅱ21は胎土がやや灰色を帯びている。

Ⅱ22～Ⅱ24は磁器染付皿。Ⅱ22は波状の口縁で、内面にぼやけた山水のような文様を描き、口縁部には銚釉を施す。Ⅱ23は、欠けていて一部しか見えないが見込み中央におそらく五弁花を、底裏中央に銘を配し、高台付近に円弧を線描し、側面に草花のような文様を描く。Ⅱ24は内面全体に草花のような文様が、外面には蔓草のような比較的簡素な文様が描かれる。Ⅱ23・Ⅱ24は肥前系か。Ⅱ25～Ⅱ27は磁器染付の蓋。Ⅱ25は外面に頂部から側部まで連続して見える濃紺の草木文様を描く。Ⅱ26は外面に笹のような文様を描く。Ⅱ25・Ⅱ26の内面の文様は、中央の意匠と周囲の円弧の線描のみで簡素である。Ⅱ27は、つまみを有する蓋であるが、つまみは端の一部しか残存していない。外面にはなんてんの実のような文様が描かれ、内面は施釉のみである。Ⅱ28は磁器仏飯で、外面には白色を呈する釉の上から赤絵による上絵付が施されている。内面には施釉のみ。底部は露胎するが部分的に垂れた釉が付着する。

Ⅱ29・Ⅱ30は、石製の硯の欠損した一部である。Ⅱ31～Ⅱ35は砥石。このうちⅡ31・Ⅱ34はおそらく欠損した硯の一部を砥石として転用したものと思われる。またⅡ32には、幅1cm弱位の研磨痕が3単位見られる。Ⅱ36は細長の石製品。上部は欠けているが、川と草木花のような文様が彫り凹められている。

SE1 出土遺物（Ⅱ37～Ⅱ44） Ⅱ37は、陶器灯明皿で、木桶二段目内埋土より出土した。内面に目跡が残し、口縁端部に煤が付着する。釉は黄灰色を呈する。Ⅱ38は堺・明石系の陶器摺鉢で、埋土上部の漆喰枠内より出土した。内側面全体に1単位10本位の摺り目を施し、底部内面にはおそらく放射状になる摺り目の一部が残っている。胎土には1cm大の小石を含み、内外面とも口縁部から胴部中ほどまで鉄釉または鉄漿をかけている。18世紀後半頃のものか。Ⅱ39は、陶器大甕で、破片の大半は埋土上部の漆喰枠内から出土したが、その下の一段目木桶内埋土出土の破片も若干接合した。底部は完存し、その二つの破片はいずれも上向きで近接して出土し、その付近にはほかの破片や石・漆喰片が集中していた。口縁部はわずかしかなかったが、漆喰枠内の北西部が攪乱で破壊されているために元来はもっとあったかもしれない。内外面に鉄釉をかけ、外面の中ほどに黒釉を垂らす。底部内面には、離れ砂が四カ所残っている。底部外面には判読不能の墨書が描かれている。Ⅱ40は、埋土から出土した非常に薄手の磁器の小椀で、外面に赤絵による上絵付が施されている。Ⅱ41は木桶二段目内埋土から出土した磁器染付底部。精良な白色の胎土で内外面薄めの呉須で染付が施される。Ⅱ42は磁器染付皿か。内外面に染付が施されるが、

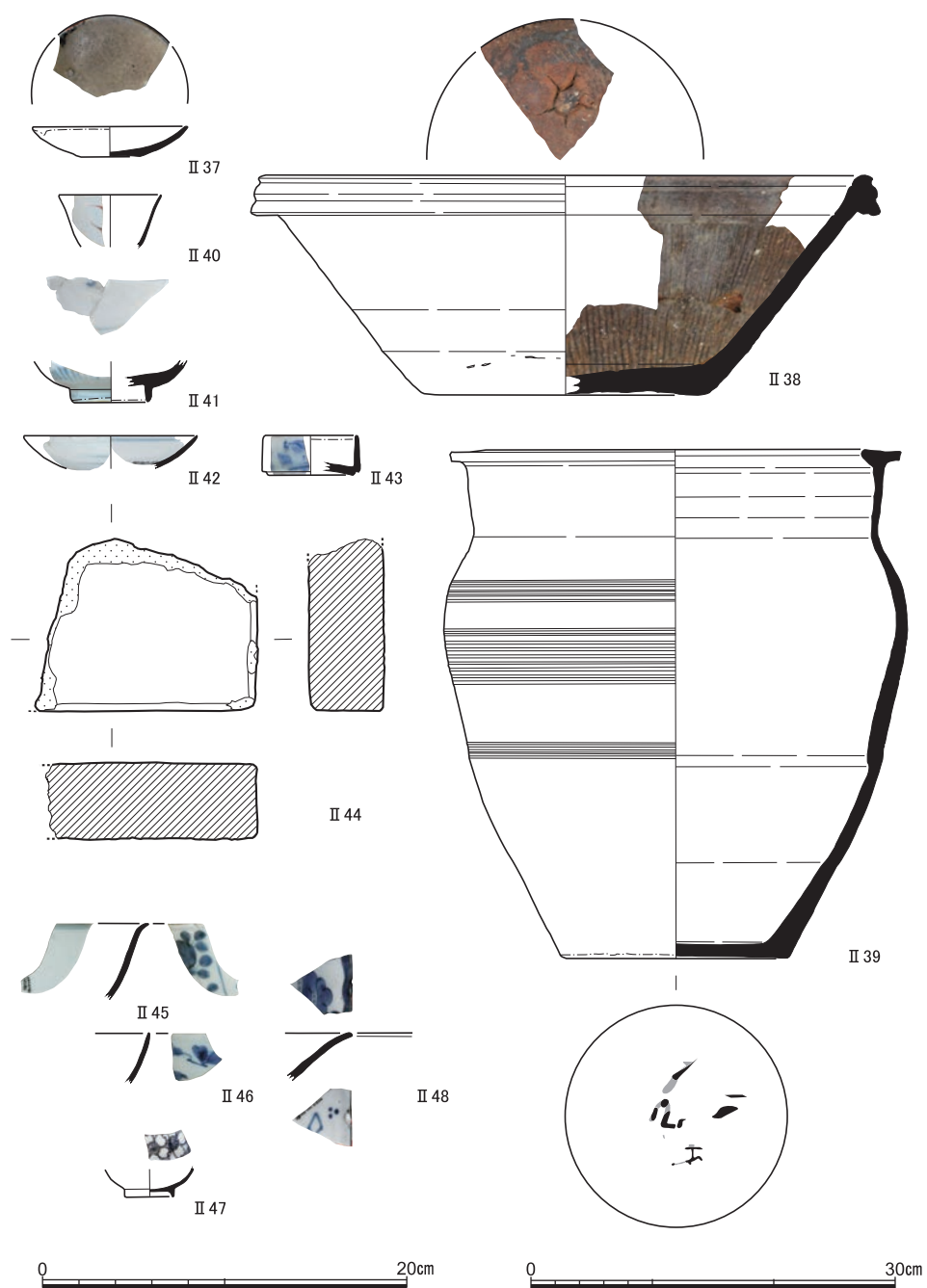


図74 S E 1 出土遺物 (Ⅱ37～Ⅱ39陶器, Ⅱ40～Ⅱ43磁器, Ⅱ44埴), S E 2 出土遺物 (Ⅱ45～Ⅱ48磁器) Ⅱ39のみ縮尺1/6

残りが悪く、蓋かもしれない。Ⅱ43は、磁器染付の蓋物の身であり、外面に文様が描かれる。Ⅱ44は胎土が褐色を呈する平らなレンガ状の焼き物で、1～5mmほどの砂粒を多く含む。四角の一角が残存する磚の一種の可能性がある。Ⅱ42～Ⅱ44は、埋土上部の漆喰枠内から出土した。

S E 2 出土遺物 (Ⅱ45～Ⅱ48) Ⅱ45・Ⅱ46は磁器染付碗の口縁であるが、残存部が少なくいずれも口径は不明である。Ⅱ45の口縁は、端反りである。Ⅱ47は磁器の底部で、内面に黒褐色で花卉文様が上絵付されている。Ⅱ48は磁器染付の角皿の一部であり内外面に文様が施されるが、残存部分が少なく大きさは不明である。

S E 3 出土遺物 (Ⅱ49～Ⅱ62) Ⅱ49～Ⅱ51は陶器蓋である。Ⅱ49は水注の蓋であり、外面上部に鉄釉を施す。蓋の中央のつまみは五弁花をあしらう。Ⅱ50は、外面上部から側面の一部にかけて鉄釉を施し、底面には糸切りの痕跡が残る、その上に所々釉が付着する。Ⅱ51は手づくねで整形し、内外面に鉄釉を薄くかけた陶器の蓋で、内外面に指押さえの痕跡が残る。胎土は暗灰色を呈し、つまみの部分は全体が欠損している。Ⅱ52は陶器甕。胴部は底部から直線的に口縁まで立ち上がる。内外面に鉄釉を施し、外面胴部上半から下に所々黒釉を垂らす。底部は完形だが、口縁は一部しか残存していない。Ⅱ53は軟質施釉陶器の手水鉢。胎土は淡赤褐色で、外側面には白色と黒褐色で白梅とその枝の文様を描き、底裏には黒褐色で「乾山」の銘が手書きされる。内外面、底裏全体に透明がかかった粉状の白色を呈する釉をかける。二代乾山に関わる物か。S E 3 出土遺物のうちⅡ51は木桶内出土、それ以外は石組内埋土出土である。

Ⅱ54～Ⅱ57は、磁器染付の碗である。Ⅱ54は、外面に草花の文様を描き、半分ほどしか残っていないが見込み部分にはおそらく五弁花を描く。内側面上部には格子状の意匠をめぐらせる。Ⅱ55は完形で、外面の二カ所におそらく五弁花山水のような文様を描く。高台は低く薄手である。Ⅱ56は外面に草花、見込み中央の二重円弧内に笹のような文様、内側面上部に格子状の意匠を描く。Ⅱ57は底部を欠くが、外面に染付、口縁の内面寄りに銹釉を施す。Ⅱ54～Ⅱ57はいずれも薄手で白色の精良な胎土を用いており、丹精に作られている。Ⅱ58は磁器染付蓋物の身で、外面に山水のような文様が描かれる。Ⅱ59は磁器染付の仏飯で完形に近い。外面の一カ所のおそらく草のような文様を描く。胎土はやや灰色がかり釉も少し緑灰色を帯びる。釉のかかっていない底裏は橙褐色を呈し、底は焼け歪んでおり作りは粗雑である。Ⅱ60は白磁の小皿であるが、残存部が1/3であり、染付の一部かもしれない。

Ⅱ61は砥石。中央での断面は長方形で、平らな面のそれぞれに使用の痕跡が見られる。

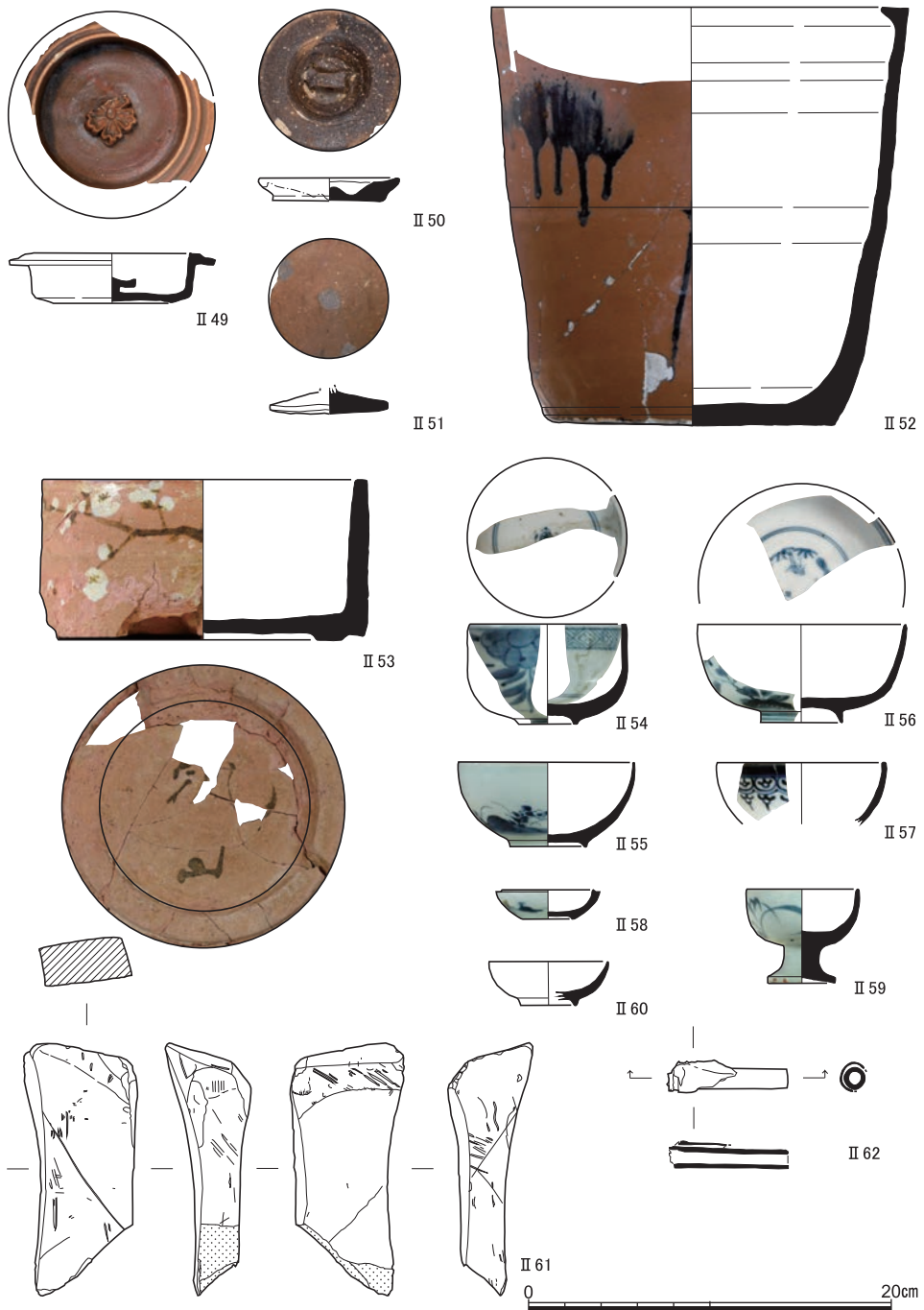


図75 S E 3 出土遺物 (II 49～II 52陶器, II 53軟質施釉陶器, II 54～II 60磁器, II 61砥石, II 62キセル)

Ⅱ62はキセルの一部。吸い口の竹管とその周囲の金属の一部のみが残存する。竹管の端部には節の痕跡が見られその付近に金属部分との隙間に溜まった灰が付着している。S E 3 出土遺物のうち、Ⅱ51は木桶内埋土、そのほかのものは全て石組内埋土出土である。

S E 9 出土遺物 (Ⅱ63・Ⅱ64) Ⅱ63は磁器染付碗であり、残りが悪いが外面に草のような文様がわずかに見える。Ⅱ64は磁器染付碗か鉢であり、外面に濃紺の呉須で草花と六角形の文様を、内面上部に格子状の文様をめぐらす。いずれも底部は残存していない。

S X 1 出土遺物 (Ⅱ65～Ⅱ70) Ⅱ65は内面に明瞭な墨書を有する土師器であるが、器種不明である。胎土は乳白色、口縁は直線的で、その外部を面取りしている。Ⅱ66～Ⅱ69は磁器染付碗。Ⅱ66は外面に梅花のような文様を描く。Ⅱ67～Ⅱ69は底部付近のみ残存し、いずれも見込み部分に文様は見られない。Ⅱ67は外面高台周辺に円弧を描き、胎土は所々やや赤変する。Ⅱ68は外面に草木のような文様、底裏に銘を描く。Ⅱ69は外面に円弧と意匠を推定できない文様を描き、見込み部分は蛇の目釉ぎ。Ⅱ70は磁器碗の口縁部であるが、1/12ほどしか残存しておらず、染付か白磁か判然としない。

S X 1 周辺出土遺物 (Ⅱ71・Ⅱ72) Ⅱ71・Ⅱ72は、磁器染付碗。外面に花鳥となんてんのような文様が描かれ、口縁部から内面上端にかけて釉剥ぎがなされている。Ⅱ72は外面に草花のような文様を描く。白色の胎土を用いた薄手の作りで、丹精に作られている。

S X 2 出土遺物 (Ⅱ73・Ⅱ74) Ⅱ73は有蓋壺の蓋。胎土は橙褐色を呈し、口縁部は2/3以上残存している。Ⅱ74は有蓋壺の身で完形、ほぼ無傷で出土した。胎土は乳褐色であり、Ⅱ73とは色調が異なる。Ⅱ73はⅡ74の蓋として合わさって出土した。

S X 3 出土遺物 (Ⅱ75・Ⅱ76) Ⅱ75は有蓋壺の蓋。胎土は乳褐色で、中央部はやや凹む。口縁部は半分強残存している。Ⅱ76は有蓋壺の身で完形、ほぼ無傷で出土した。胎土は乳褐色である。Ⅱ75とⅡ76は合わさって出土した。

S X 4 出土遺物 (Ⅱ77・Ⅱ78) Ⅱ77は有蓋壺の蓋。胎土は乳褐色で、口縁は3/4以上残存する。Ⅱ78は有蓋壺の身で、底はほぼ完形に近いが口縁は一部を欠き、隣接するS X 3の有蓋壺をこれより後に埋めたためか、やや壊れた形で出土した。胎土は乳褐色である。Ⅱ77とⅡ78は合わさって出土した。なおS X 2～4の有蓋壺は胞衣壺と呼ばれるもので、蓋は上からの土圧のためいずれも破片に割れた形で出土した。

S X 6 出土遺物 (Ⅱ79～Ⅱ82) Ⅱ79・Ⅱ80は土師器皿である。Ⅱ79は乳赤褐色の胎土で、見込みに明瞭な圈線を有する。Ⅱ80は二次的な火の影響で破片全体が黒化し、内面は更に赤みを帯びる。見込みに圈線を有するがⅡ79に比して不明瞭であり、やや時代の古

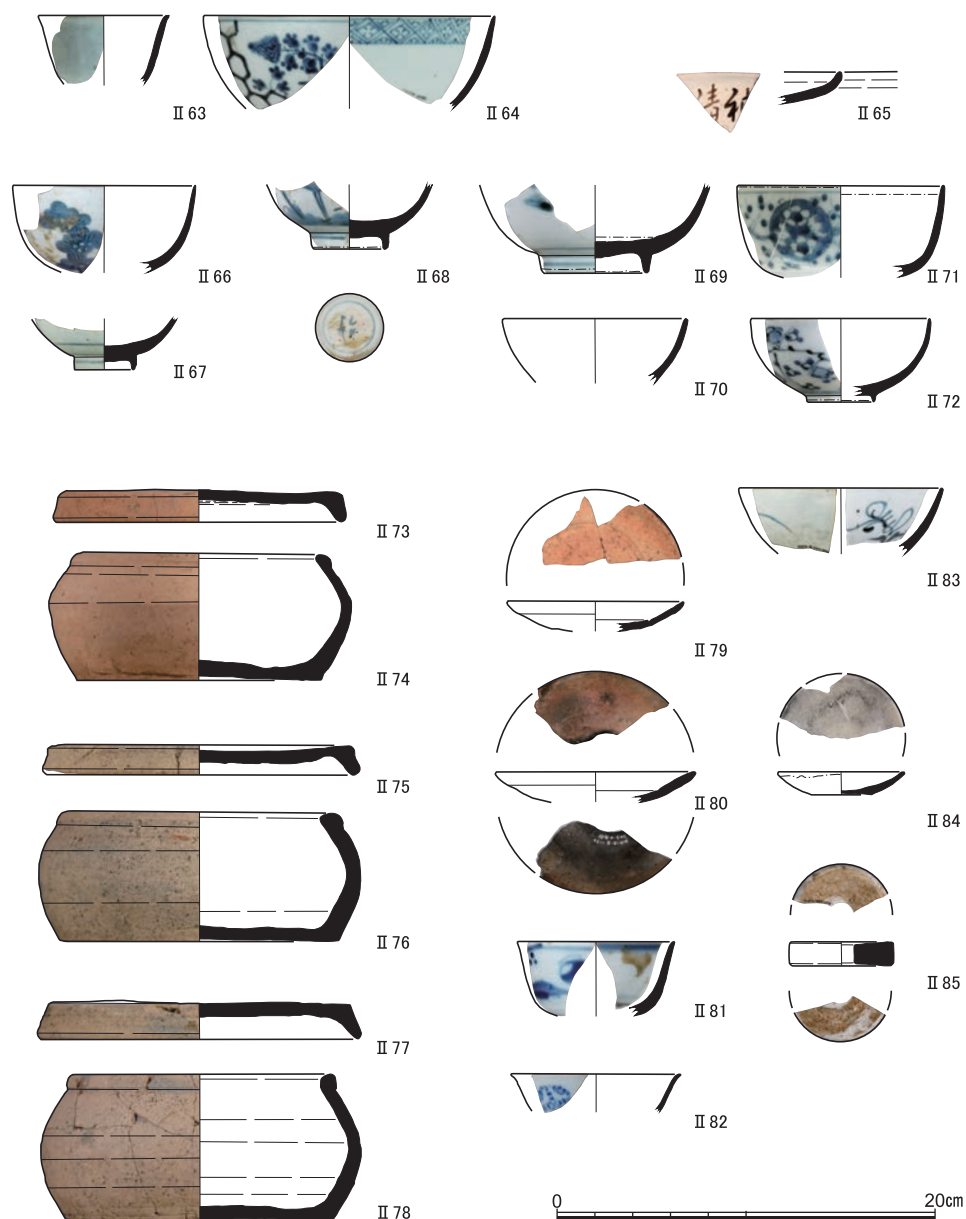


図76 S E 9 出土遺物 (II 63・II 64磁器), S X 1 出土遺物 (II 65土師器, II 66～II 70磁器), S X 1 周辺出土遺物 (II 71・II 72磁器), S X 2 出土遺物 (II 73・II 74土師器), S X 3 出土遺物 (II 75・II 76土師器), S X 4 出土遺物 (II 77・II 78土師器), S X 6 出土遺物 (II 79・II 80土師器, II 81・II 82磁器), S K 8 出土遺物 (II 83磁器), S K 9 出土遺物 (II 84陶器, II 85戸車)

いものかもしれない。Ⅱ81・Ⅱ82は磁器染付碗。いずれも底部が残存しない。Ⅱ81は口縁部がやや端反りで、外面に花のような文様、内面に線描をめぐらす。Ⅱ82は端反りの口縁で、外面に文様、口縁部の内側に銹釉を施す。胎土は白色で薄手である。

S K 8 出土遺物（Ⅱ83） Ⅱ83は磁器染付碗。内外面に草花のような文様を施す。

S K 9 出土遺物（Ⅱ84・Ⅱ85） Ⅱ84は陶器灯明皿。内面から口縁付近に灰色を呈する釉を施す。内面には目跡が残り、口縁の一部と内外面の一部は火の影響によりやや黒ずんでいる。Ⅱ85は白磁の戸車の一部と思われ、外周と中心には回転しやすいように白磁釉が施されている。

S E 8 出土遺物（Ⅱ86・Ⅱ87） Ⅱ86は、土師器皿。胎土は乳赤褐色で、見込みに明瞭なV字形の圈線を有する。口縁部全体に煤が付着し、灯明皿として使用したものと思われる。18世紀頃のものか。Ⅱ87は磁器染付碗で半分弱が残存している。外面に濃紺の呉須で桐のような文様を多数描き、内面は施釉のみである。底裏には「年製」の銘のみが読める。全体に薄手で白色の胎土を用いて丹精に作られている。Ⅱ86・Ⅱ87とも石組内埋土出土である。

S X 13 出土遺物（Ⅱ88・Ⅱ89） Ⅱ88は陶器灯明受皿。内面から外面上部まで淡灰色の釉を施し、口縁と立ち上がり上端に銹釉を施す。受口部は残存していない。外面露胎部はやや赤化している。Ⅱ89は磁器染付碗で、口縁部が1/12強残存するのみであるが筒型碗か。外面は染付の後、赤、緑、金、黒褐色で上絵付けが施されている。内面には口縁近くに染付で格子状の文様をめぐらす。

S K 1 出土遺物（Ⅱ90～Ⅱ92） Ⅱ90は陶器灯明皿。内面から口縁部にかけて黄白色を呈する釉を施す。火の影響で内外面とも全体にやや黒ずんでいる。Ⅱ91は磁器染付小碗。薄手の作りで、見込み部分に文様を描き、底裏に薄く銘を描いている。Ⅱ92は白磁の皿。薄手のしっかりした作りで、外面は高台の少し上で折れ曲がり口縁に向かって外反する。幕末頃のものか。

S K 4 出土遺物（Ⅱ93～Ⅱ102） Ⅱ93は土師器小皿。赤褐色の胎土で、内外面上部に横ナデを施す。Ⅱ94は陶器碗。内外面に黄白色を呈する釉を施し、外面にはその上から緑と青色で絵付けを施す。Ⅱ95はS K 4 底部出土の陶器蓋。外面上部に黄白色を呈する釉を施す。Ⅱ96は軟質施釉陶器の小壺で、玩具の一種か。乳白色の素地の上に外面に部分的に緑色を呈する釉をかける。口縁付近以外ほぼ完形のため、胴部は器壁の厚みが実測できなかった。Ⅱ97は青磁染付の鉢。胎土は白色で外面に青磁釉を施し、内面には上部を中心

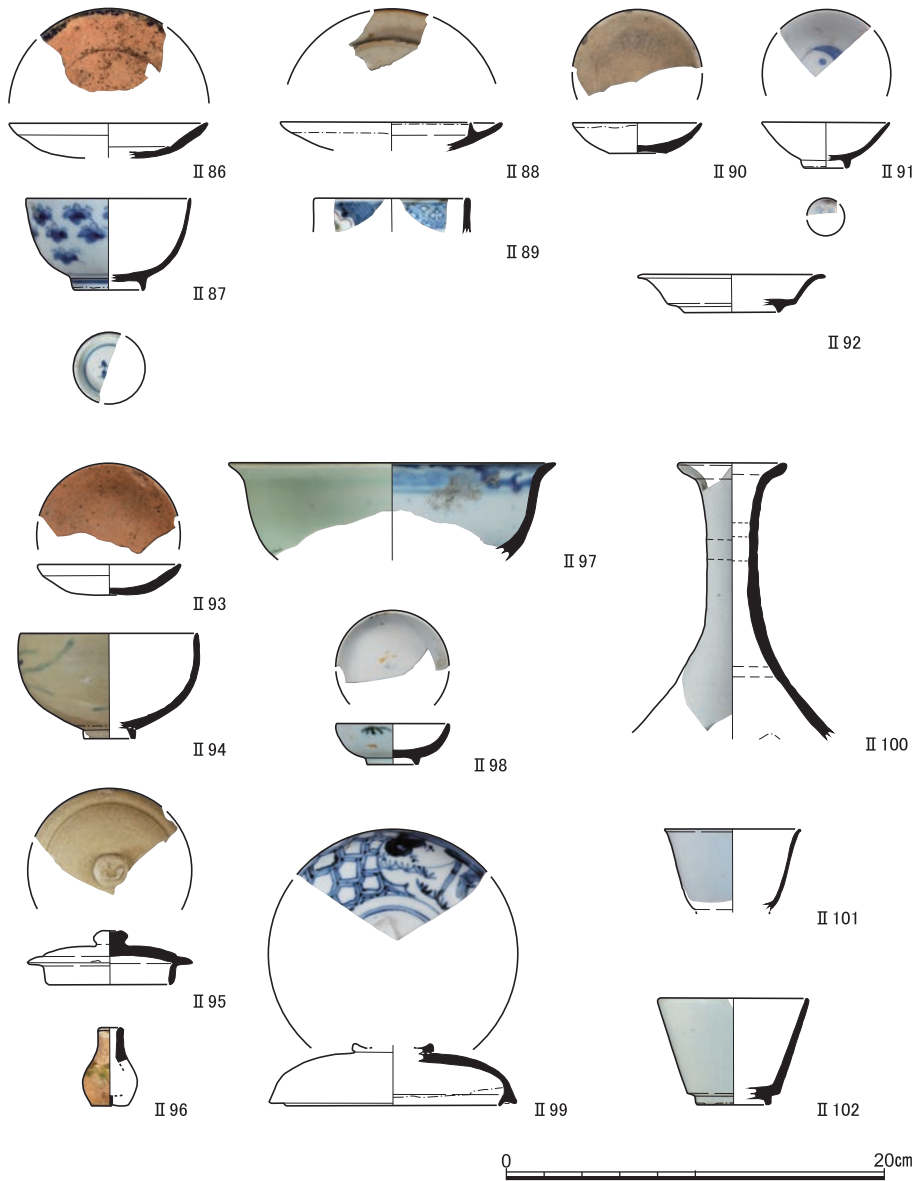


図77 S E 8 出土遺物 (II 86土師器, II 87磁器), S X13出土遺物 (II 88陶器, II 89磁器), S K 1 出土遺物 (II 90陶器, II 91・II 92磁器), S K 4 出土遺物 (II 93土師器, II 94・II 95陶器, II 96軟質施釉陶器, II 97～II 102磁器)

に呉須でばやけた文様が描かれている。19世紀前半頃のものか。Ⅱ98は磁器染付小椀。外面の一部に笹の葉のような文様、見込み中央にかすかに銘か文様が見られるほかは、ほとんど文様が施されていない。胎土は精良な白色で、高台畳付は釉剥ぎをしていて赤化している。Ⅱ99は磁器染付蓋。つまみの端は一部のみ残存する。外面には濃紺の呉須で五角形の組み合わせと笹のある庭園のような文様が描かれている。内面は施釉のみで、身と合わさる部分は露胎している。Ⅱ100は磁器染付の長口壺。口縁部は3／4近く残存するが、胴部から下は欠けている。外面残存部の最下部にわずかに染付が見える。胎土はやや灰色を帯び、内面にも釉がかかるが残存部の最下部は露胎する。Ⅱ101は白磁の椀。胎土は精良な白色で、薄手の作りである。高台は残存していないが、胴部からの屈曲部はわずかに残っている。Ⅱ102は白磁の椀。胴部は直線的に斜めに立ち上がり、胎土および釉の色調はやや灰色を帯びる。

S X11出土遺物（Ⅱ103～Ⅱ112） Ⅱ103は土師器平壺。乳白色の胎土で、側面を轆轤による水引き整形し、底部外周を平らに、底部中央を内湾させて篋ケズリを施している。19世紀前半頃のものか。ほぼ完形であるが、底部の中央は穴が開いて欠けていて、出土時には底部が上を向いていた。Ⅱ104は瓦質の浅い容器であるが器種不明である。胎土は乳白色、表面の色調は淡灰色を呈する。底部の残存状況から、おそらく六角形の器形であると推定される。底面の破片と側面の破片は直接接合しないが、底部と側面は接合部で剝離し、側面の破片は一部が底部にかかっているため、つなげて図示した。底面と側面の間に粘土の接合痕があるほか、口縁部と側面の間にも粘土の接合痕が見える。口縁内面の接合部付近から底部を含めた外面全体に磨きをかけている。

Ⅱ105は陶器深皿又は鉢。口縁上端は面取りし、高台畳付および口縁部を除いて乳白色の胎土の上から黄白色を呈する釉を施す。Ⅱ106は陶器皿。内面に鉄絵を描き、内面全体と外面に淡黄灰色を呈する釉を施す。見込みには三カ所目跡が残る。Ⅱ107は焼締め陶器の蓋か。胎土は乳赤褐色を呈する。外面全体は梅花をあしらったような意匠で、輪花状口縁をともなう花卉の中央に12本のおしべを模した文様が浮き彫りにされ、めしべにあたる中心部は円形に凹められている。内面の中心部周辺は口縁端部と同じ位の高さまで下方へ向けて環状に突起し、その下端は平らに整形されている。Ⅱ108も焼締め陶器で、鉢状だが機種は不明。胎土は乳赤褐色を呈する。上から見た口縁部の形状は、辺の中央がやや外側へ膨らんだ方形になると思われるが、全体の1／4強しか残存していない。底部は半分ほど残存しており、下から見た形は円形又は楕円形である。外面は底部から胴部にかけて

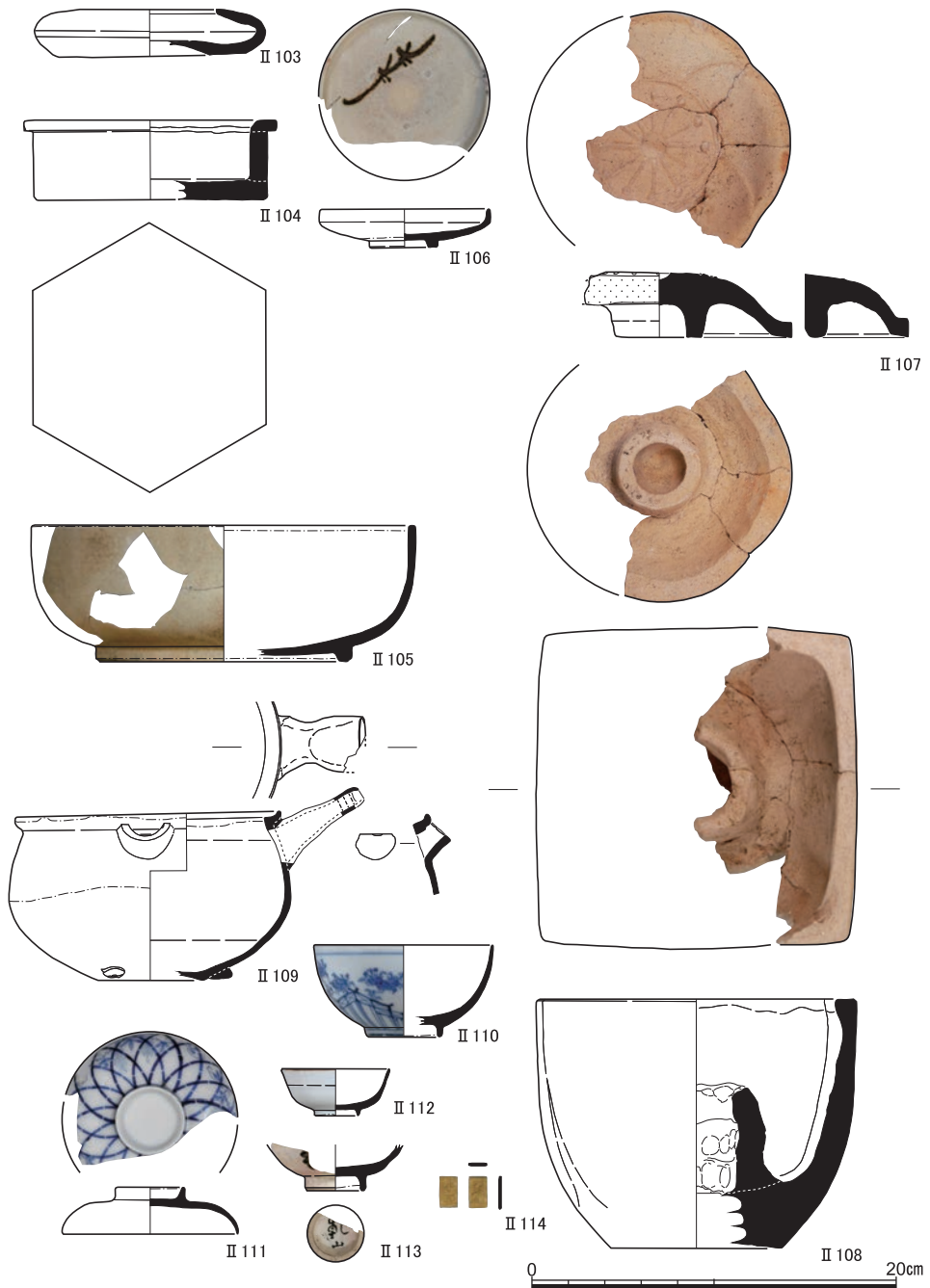


図78 S X11出土遺物（II 103土師器，II 104瓦質土器，II 105～II 109陶器，II 110～II 112磁器），砂礫上面出土遺物（II 113陶器），黒灰色土出土遺物（II 114一分判）

丸みを帯びて立ち上がり、口縁では方形の角に合わさる。底部は篋削りをし、外側面は水引き整形をしている。内面の中心部周辺には、手づくねで整形した環状の突起を接合している。突起部には粘土紐の接合痕のほか、多くの指頭圧痕が残る。この突起の機能はよくわからない。Ⅱ107とⅡ108は胎土、焼成とも酷似しているが、組み合わせらない。

Ⅱ109は、陶器行平鍋。乳白色の胎土で、蓋と合わさる部分を除いた内面と、外面上半に淡黄灰色を呈する釉をかける。把手と注口部が残存し、底部には飾りの脚が3箇所が付されている。内外面底部付近には煤が付着し、底の中心部は欠けている。Ⅱ110は磁器染付碗。外面に花鳥と間仕切りのような文様を描く。Ⅱ111は磁器染付蓋。外面に草花と竹を曲線的な格子状に意匠化したような文様を施す。Ⅱ110、Ⅱ111とも内面は施釉のみで、外面は濃紺の呉須で文様が描かれている。また胎土は白く薄手で、丹精に作られている。Ⅱ112は白磁小碗。胎土は白く薄手で外面の胴部中央が条線状にわずかに膨らみ、口縁部には銹釉を施す。19世紀前半頃のもののか。

包含層出土遺物（Ⅱ113・Ⅱ114） 近世～近代の遺物は、近代陶磁器を中心に大量に出土したが、ここでは特筆すべきものを2点図示する。Ⅱ113は、調査区東辺の第6層（褐色砂礫）上面で出土した陶器碗で、底裏に「乾山」の銘が手書きされる。Ⅱ114は、調査区西辺の第2層（黒灰色土）下半の掘削中に出土した一分判。縦17.6mm、横10.5mm、厚さ1.6mm、重さ3.3gをはかる。表面には、上部に扇枠に桐文、中部に「一分」の文字、そして下部に桐文が刻印され、裏面には、上部に「光次」の署名と右上に草書体の「文」、下部に花押が刻印されている。刻印の特徴から、文政2年（1819）に発行された文政一分判と思われる。

近世遺構出土瓦（Ⅱ115～Ⅱ133） Ⅱ115はS D 128出土の巴文の軒丸瓦。瓦当接合部で剥離しており、全体の1／3位しか残存していない。Ⅱ116とⅡ117はS E 1一段目木桶内出土であり、Ⅱ116は巴宝珠文軒丸瓦。瓦当下半部と玉縁は欠けている。玉縁近くに焼成前の穿孔が施されている。凹面には布目の痕跡と、瓦の長軸方向に直行する鉄線切り（コビキB）の痕跡が残る。Ⅱ117は軒棧瓦であるが、瓦当部は剥離してほとんど残存しておらず、唐草の一部のような文様がわずかに見えるのみである。後部の中央付近の二カ所に直径5mm強の焼成前の穿孔が半分ほど見られ、これより後ろの破片は残存していない。これとは別に2孔から等距離のやや前側に焼成後の穿孔が施され、下面側のその周囲は表面が剥離している。このことから見て、二カ所の穿孔部を釘で止めていたがそれより後ろが割れて、新たに手前の中央付近に一カ所穿孔して釘で止め、瓦を葺き直したものと推定で

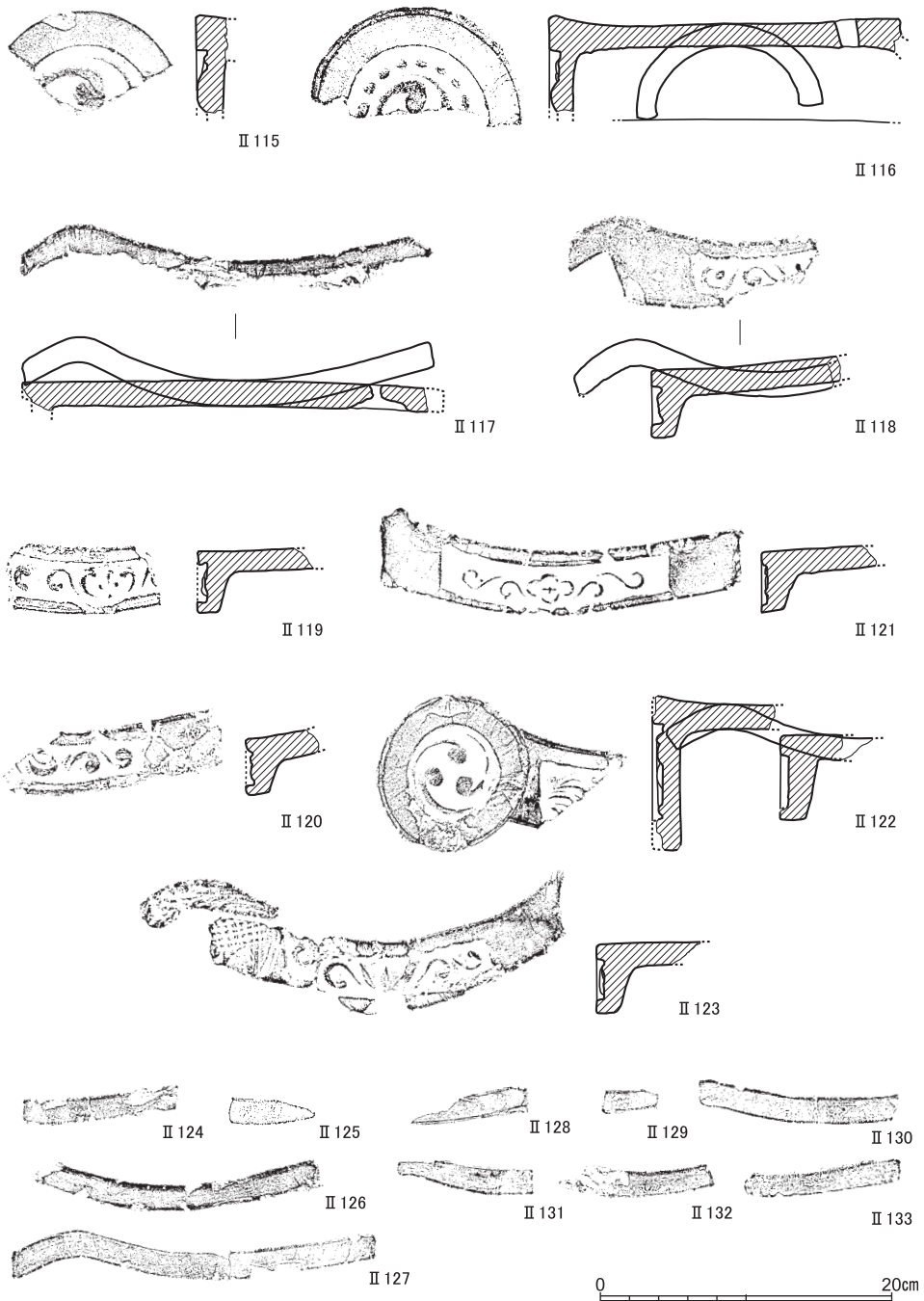


図79 近世遺構出土瓦（II 115・II 116軒丸瓦，II 117～II 123軒棧瓦，II 124～II 133刻印棧瓦） 縮尺1/5

きる。

Ⅱ118はS X 6出土の軒棧瓦であり、瓦当は平瓦部のみからなる。三葉弁のような文様を中心に二回反転の唐草を配したものである。Ⅱ119はS K 8出土で、軒棧瓦と思われるが、棧部が残っていないため軒平瓦の可能性もある。左右の葉弁が内傾した三葉弁内に逆三角形に三珠点を配置したような文様を中心に、少なくとも二回反転の唐草を配する。Ⅱ120はS X 11出土。Ⅱ120は宝珠文を中心に二回反転の唐草を配し、正面から見た瓦当右端の楕円形囲みの中に「長」の刻印を有する。Ⅱ121～Ⅱ123は瓦溜まりS X 13出土である。Ⅱ120・121は軒棧瓦で、Ⅱ121は横長の十字形の周囲に配置した四花文を中心に二回反転の唐草を配する。Ⅱ122・Ⅱ123は丸瓦部にも瓦当を備えた軒棧瓦である。Ⅱ122は丸瓦と平瓦の部分が接合部で剥離していたが接合した。丸瓦部は三巴文であるが、平瓦部は残りが悪く、文様がよくわからない。Ⅱ123は、丸瓦部が接合部で剥離してその破片は見つからなかった。平瓦部は三葉弁を中心に二回反転の唐草を配する。

Ⅱ124～Ⅱ133は刻印を有する棧瓦で、Ⅱ124～Ⅱ127はS X 6から、Ⅱ128～Ⅱ133はS X 13から、それぞれ出土した。このうちⅡ124・Ⅱ128・Ⅱ129は八弁の花弁を持つ菊花の刻印で、いずれも正面から見て瓦の右端近くに刻印が押されている。花弁の形はⅡ124が丸みを帯びた滴形、Ⅱ128・Ⅱ129が三角形であり微妙に異なる。正面から見て右寄りに押した八花弁の菊花の刻印は四天王寺元三大師堂の近世瓦に例がある〔山崎2008〕。Ⅱ125は、楕円形囲みの中に棧部を上にした横向きに「渚」および右半の見えない文字を書いた刻印で、瓦の中央付近に刻印がなされている。

Ⅱ126は、四角囲みの中に棧部を下にして横向きに右半に「大ふつ」と書き、左半は一部が剥離と瓦からはみ出ているためよく読めない刻印である。この刻印の下に別の刻印の四角囲みの左端の一部と思われる痕跡がある。このことから、焼成前の棧瓦を何枚も並べて「大ふつ」の字がよく読めるようにややずらしながら連続して刻印を押した可能性もある。大仏瓦師に関係あることを強調するためかもしれない。なお刻印は正面から見て瓦の右寄りに押されている。

Ⅱ127は四角囲いの中に「甚」のような字を書いた刻印で、瓦のほぼ中央に押されている。Ⅱ130～Ⅱ132は四花を繋げたような意匠の刻印で、瓦の中央付近に押されている。Ⅱ133は上部がはみ出ているがおそらく円形又は楕円形囲みの中に書かれた「善」の字の刻印で、正面から見て瓦の右端寄りに押されている。

4 小 結

今回の発掘地点では、汚染土壌の除去のために、遺物の回収もままならなかった上に遺跡に関する情報の記録も満足にはできなかった。したがって、以下で述べる、本調査区における近世の土地利用にかんしては、限られた資料に基づくことをことわっておかねばなるまい。

(1) 中世以前の堆積環境

本調査区の近世の鋤溝群の基盤となっているシルト層（第5層）は、北接する338地点ではその調査区の東南部で、褐色砂礫（338地点第10層）の上位に下面が標高45.5m前後からいくぶん東下がりになる状態で限定的な範囲に堆積していた「暗灰色粘土層」（同第9層）に連なるものである。それよりも南の下流側に位置する本調査区でも、下面は標高45.0m前後で同様に東下がり堆積しているが（図67・68）、分布域は東北辺から中央部を経て南辺へと拡大している。すなわち、およそ東北から西南の方向に高野川系の流路堆積物である褐色砂礫層（本調査区第6層）が自然堤防状に堆積するその東南部の後背湿地に、細粒のシルトが埋積していったことをうかがわせる。そしてその堆積は、今回の3点の放射性炭素年代によれば縄文早期頃には始まっていたことがわかる。

本調査区の東南に位置する278地点の北壁では〔千葉ほか2007〕、標高45.0m前後に、厚さ30cmほどで上方細粒化する青灰色シルト～泥炭質土が堆積する部分があり（278地点第7層）、高野川系流路の厚い砂礫（同第6層）に覆われている。しかしこの砂礫層は、堆積年代は縄文後期前葉（北白川上層式2期）頃で、もっとも残りの良い部分では標高は47mを超える。さらには、この砂礫層の上位には縄文後期中葉（北白川上層式3期）の白川系流路がもたらした粗砂層があり（同第4層）、この両者の堆積によってできたさらに東側の後背湿地には晩期の黄色シルト層（同第5'層）が堆積する。

本調査区の主に青灰色を呈するシルト層については、堆積開始年代は278地点の堆積状況とも矛盾しないが、上部の、遅くとも15～16世紀頃までの氾濫起源と思われる堆積物の褐色混礫砂層（本調査区第4層）とは不整合に連なる。北接する338地点でも、このシルト層の上位の徐々に西方へと堆積していった黄褐色砂群（338地点第8'層）からは、中世まで時期の下る可能性のある土師器細片と摩滅した縄文中期初頭の土器片の2点が出土している〔富井・笹川2010〕。両地点のこの砂層も対比が可能であろう。また、本調査区の西南100m辺りの39・122地点では、平安中期から現地性の活動痕跡が認められるがその

基盤となる砂礫層は、上面の標高が45.5mを超える部分もあり、包含遺物としては弥生時代や奈良時代の摩滅した土器片が出土する〔京大埋文研1981a〕。したがって、同様に、本調査区第4層と338地点第8'層に対比する部分を見いだせよう。なお、縄文から古代の遺物は本調査区でも338地点でもほとんど出土していない。

以上から、第5層のシルト層を堆積させた環境について、次のように推測する。縄文早期までには、本調査区の北方から西辺にかけての褐色砂礫層（338地点第10層および本調査区第6層）が標高およそ46m前後まで堆積して自然堤防となり、それを西北限としてその後背湿地状の窪みに比較的広大な滞水域が広がっていた。そして、その窪みには、縄文後期前葉において高野川系の流路の出水によって上流部で自然堤防が決壊して褐色礫層（278地点の第6層）が堆積したり、縄文後期中葉において白川系流路の流入によって灰白色粗砂（278地点の第4層）が堆積したりする。遅くとも弥生時代以来、平安時代中頃までは、本調査区から数十m西ではたびたび高野川系の流路が襲うが、本調査区は、鎌倉時代までに出水が時折あった可能性はあるものの、およそ、後背湿地のような淀んだ水域だった。

(2) 中近世の土地利用

中世末期の土地開発 338地点では、16世紀には人びとが積極的に進出して井戸を掘削している〔富井・笹川2010〕。本調査区では、通常の水成堆積ではない褐色混礫砂層（第4層）に15～16世紀の土器が認められるが、仮にこれが人為性の堆積物であるとすれば、16世紀頃に湿地帯に耕作地を確保するための土地改良がおこなわれた、と評価できよう。出水のような自然現象による堆積物だとしても、結果的には、それによって湿地帯の干拓化が進み耕作地が形成されていった。そして、東方からの活動が、338地点や本調査区あたりを経て、地続きに西方にまで広がっていく。すなわち、吉田山西麓から高野川系流路東岸にかけての低地部開発という視点で見れば、16世紀頃からは地続きで安定的に展開できる堆積環境が整ったと言えよう。

本調査区の150m西に位置する349地点では、遅くとも13世紀に遡る高野川系流路の堆積による砂礫層が徐々に西に移動しながら最終的に16世紀頃に離水している状況が認められた〔千葉・富井2011〕。また、本調査区の北西150mに位置する384地点では、16世紀頃には、側溝を備えた道をともなう直線的な流路が北北東から南南西方向にはしり〔伊藤2014〕、この辺りの治水が16世紀頃には整っていたことをうかがわせる。こうした状況は、上記の理解に矛盾しないだろう。

近世の土地利用 17世紀以降は、338地点で18世紀頃の土石流堆積物が確認されているものの、そのほかには砂層や礫層などの自然堆積物の比較的広域的な分布はこれまでのところ確認できていない。こうした安定的な環境下で、田畑が営まれていたのだろう。少なくとも吉田村および聖護院村に含まれるこの一帯では、寛文新堤の効果もあって〔吉越2006, 千葉・長尾2014〕, 近世の高野川（鴨川）の河川管理は比較的良好に機能していたと評価したい。

本調査区は、聖護院村の西北縁として位置づけられると思われるが、居住に関する明確な痕跡を確認してはいない。調査区東北部では、黒灰色土（第2層）の掘削中および掘削後に幕末頃までの時期の、いわゆる胞衣壺を3基（S X 2～4）とその南側に瓦溜まり（S X 5・6, S K 8）を検出している。しかし、日常什器が多く出土したわけではなく、瓦も居住用の構造物での使用にともなうにしては出土量が少ないように思われる。その一方で、すぐそばには野壺S E 1もある。また、すぐ北側の338地点東南部では、18世紀の陶磁器の廃棄を確認しているがその後は耕作地となっている。こうしたことから、本調査区東北部は、少なくとも18世紀の終わりごろからは、基本的には田畑だったと考えたい。瓦溜まりや胞衣壺については、祠での地鎮と考えることもできよう。

調査区南半では、黒灰色土中に土器溜を検出でき、幕末までの時期におさまるものがあったが、南縁部に分布する淡褐色土（第3層）の掘削がかなわなかったので、いつ頃からこうした日常什器の一括廃棄がおこなわれる空間となったのかはわからない。第2層の直下に第6層（褐色礫層）の分布する調査区西南辺では、ほとんど鋤溝群は確認されなかったが、黒灰色土の下部でも17世紀にまで遡るような陶磁器や土師器は非常に少なかったので、居住域だったとしても早くとも江戸時代後半からと言える。

東接する278地点では、調査区南辺で乾山焼やその焼成に関わる生産関連遺物も出土しており、二代乾山による「乾山焼工房」に関わると推定されている。本調査区では、東南部の広い範囲が攪乱を受けているものの調査区の東北辺で乾山焼と認め得る製品が2点出土したにとどまる（Ⅱ53・Ⅱ113）。278地点で推定した生産関連の場合は、本調査区にまでは達していないと判断してよからう。なお、Ⅱ113については、「乾」の第1画のタッチが278地点のそれらとはまったく異なっている。

19世紀に残した富岡鉄斎の絵図によれば（京都市編1985）、本調査区は、安政～文久年間（19世紀前半）に画家の小田海仙の居住域の北東部を、西南部辺りに内包していたことが想定された〔京都大学総合博物館2000〕。今回、それを裏付ける資料は確認できなかった。

しかし、調査区西辺を南北にはしる段差の上位（すなわち西側）の南半部からは、段差の下位に多数あったような鋤溝は検出されない一方で、近世後半から明治初期にかけての、石組み井戸や瓦溜まり、陶磁器類が多量に廃棄された土坑や溝が確認されており、田畑ではなく日常的な生活空間の縁辺部を想定させる。そして、黒灰色土からは埴塼の破片もしばしば出土していた。加えて、黒灰色土の下部を掘削中に出土した金属水銀は、絵画などに用いる赤色の顔料として水銀朱を獲得するために辰砂を加熱した副産物とも考えられる。こうした点は、本調査区に小田海仙の居住域が含まれ得るという想定とも矛盾しまい。

このような調査区東北辺・西辺・南縁の様相に対して、段差下位の調査区中央部から東部にかけては、緩い傾斜ややや大きめの溝に区切られた方形区画の整った空間の中に、鋤溝がおもに東西方向にはしる。そして、その地山は、北辺や西辺の段差上位の褐色砂礫層ではなくその上位に堆積したシルト層である。地山に保水力のあるより低位の空間は、水稻耕作に向いていたと思われるし、大根で有名な聖護院村の一角に位置することも踏まれば、近世には二毛作も実施されていたことだろう。そしてこうした区画は、出土遺物と層序から、18世紀にはさかのぼり得る。

なお、北接する338地点で確認されている、18世紀には存在していたY=1850ライン辺りをX=910ライン辺りまで南北にはしる段差は、そのほぼ延長上にある本調査区とは逆に、西下がりで段差際では比高差が20cm程度になる。しかし、338地点では、そのまま西に進むと下位の砂礫層の上面は、むしろ西上がりになっていく。本調査区でのX=880以南で東下がりの段差との関係は、かつての高野川の氾濫によってできた中州状の地形やそれに規制されるシルト堆積にかかわる微地形を反映した、と判断したい。

本章は、第3節(2)を長尾が、そのほかを富井が執筆し、全体を富井が調整した。現地調査および整理作業は、富井眞・長尾玲が担当し、河野葵・西田陽子・李佐和子・高木康裕が、測量および出土資料の実測・復元などをおこなった。なお、木材について村上由美子氏（総合地球環境学研究所）から有益なご助言をいただいた。記して謝意を表します。